

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻内の専門分野ごとに中心となる科目を設置し、その他にも教養的な科目を配置することによって、専攻における専門性を高めるとともに、個々の学生が幅広い教養を身に着けられるようにしている。	専門の分野に閉じこもることのないように、研究進捗状況の中間発表会を行ったり、ゼミを実施したりするなどして互いの状況を把握しつつ積極的に勉学や研究に取り組めるようにしている。	専攻内の各教員が厳格に成績評価を行い、学位授与に際しては研究発表内容をしっかりと吟味している。	各教員が個々の学生についてしっかりと学習成果を把握しており、研究については新たな知見が得られた場合には、できる限り学会・国際会議・シンポジウム等での発表を行わせるように指導している。	一部においては授業実施内容等について複数教員が内容のチェック等を行っているが、まだまだ不十分である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・しっかりとした基盤となる教養に基づいて、自らの専門を極めることができる。	【長所】 ・異なる専門分野の学生等からの思わぬ発想やアイデアを自分の専門領域に向けることができる。	【長所】 ・比較的他分野の集合体である農学専攻では、教員によって視点が多様であり、評価が一面的とならない。	【長所】 ・学位授与方針が明確であるため、学習成果の評価を行うに際してブレが少ない。	【長所】 ・定期的な点検を行うことにより、課程全体の学習状況や研究実績の向上が可能となる。
	【特色】 ・農学専攻が比較的多分野の集合体であることから、広い視野を養うことができる。	【特色】 ・農学専攻が比較的多分野の集合体であることから、豊かな発想能力を養うことができる。	【特色】 農学専攻が多分野の集合体であることから、多様な視点からの厳しい評価を行うことができる。	【特色】 ・明瞭かつ公正な評価が行われている。	【特色】 ・学生側からの意見等も反映させ、適切性保てるよう常に心掛けている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教養的な部分が必ずしも十全ではなく、もう少し幅広い観点からの授業が求められる。	【問題点】 ・研究室ごとの学生数にばらつきがあるため、必ずしも全員が恩恵を受けているとは限らない。	【問題点】 ・あまりに異なる分野の研究であるばあいには、学位授与に際しての評価を行うことが困難な場合がある。	【問題点】 ・一部、学習困難な状況に陥る学生が出ている。	【問題点】 ・農学専攻が比較的幅広い分野を抱えているため、一律に全体を扱うことが難しい。
	【課題】 ・他専攻などとの共通科目等を設置するなどの対応が求められる。	【課題】 ・異なる専門分野の複数教員による指導等が望まれる。	【課題】 ・同一分野の中に複数の指導教員いることが望ましい。	【課題】 ・指導教員との間の密な接触が必要とされる。	【課題】 ・同一分野内に複数の教員を配置し、各分野における適切性をチェックできるようにしたい。
根拠資料名	◆シラバス、◆専攻3ポリシー	前期および後期に園芸関係分野の院生の公開研究発表会を実施した。指導(准)教授に加え、その他の教員、学生も参加した。	◆「学位論文審査基準について」(学則、学生便覧、HP)、 2月8日に修士論文発表会をすべての指導(准)教授に加え、その他の教員、院生、学生が参加のもと実施、その後指導(准)教授による学位審査を行った。	◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケート実施後の「教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書」

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本年度からは推薦入試による学生の選抜枠を大幅に拡大し、早い時期から専門性を重視したかたちでの入学者選抜を行うことができた。説明会を随時開催し、進学希望学生の動向を事前に把握して適切に対処できるように心がけている。今後 GPA2.0 以上という受験基準が決まったが、農学専攻では過去の合格者はすべてクリアしており、また進学希望者についても充足されており、今後もこの方式で早期に大学院に入学を希望する学生を確保していきたい。	年に3回（推薦，Ⅰ期およびⅡ期）行われる入試時期に，その時の状況等について教員間でのディスカッションを行い，適切性について十分な取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・遅くとも研究室配属がきまる学部3年次のころから，大学院進学に関する情報をあたえることができ，より意欲の高い学生に早期のうちに高いレベルに引き上げることができている。	【長所】 ・入試の回数が多いため，必然的に入試の実施について検討する機会が増加する。
	【特色】 ・学部在籍の早いうちから，より高度な専門教育や研究をめざす人材を発掘することができている。	【特色】 ・多数行われる面接等の機会により，学生の研究意欲をより適切に評価できるようになる。農学専攻が比較的多分野の集合体であることから多面的に進学希望学生の評価を行える。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・比較的前期（推薦およびⅠ期）のうちに入学枠の大半を満たすことになるため，Ⅱ期の時点で優秀な学生を取り損なう可能性がある。	【問題点】 ・早期に実施される入試（推薦およびⅠ期）においては教員側の意欲も高いことが多いが，Ⅱ期の時点になるとやや意識が低下する可能性がある。
	【課題】 ・定員枠を上回ることを気にせず，優秀とみなされた学生については積極的に選抜していけるようにしたい。	【課題】 ・教員側も常に次代の研究者を育成するという使命をよく心得て，常に意識を高く保てるようにする必要がある。
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP 等、◆大学院入試説明会の実施記録（参加者数等含む）、◆専攻3ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農学専攻内の専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように心がけている。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	大学院が独立した存在ではなく、どちらかといえば学部の上の付属物的な形での存在であるため、どうしても学部における教員組織の充実が先行する傾向にある。	本年度は指導准教授として2名の昇格者があった。このことにより、同一専門分野における複数教員による体制が整備された。	専攻内の専門分野が多岐にわたるため、組織的な対応が行われているとはいいにくい面もあるが、できる限り内部での昇格者を登用するなど、組織の充実に努めている。	必ずしも定期的な点検は行っていないが、学部再編等による教員の異動が予想されるため、適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・種々の教員による専門的な指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編制が充実すれば、それに伴って大学院の組織も充実する。	【長所】 ・若くて優秀な指導教員の出現により、当該分野における進学者を多数確保できた。	【長所】 ・内部昇格者は専攻内の現状に通じており、今後の発展性についても適切な判断が下せる。	【長所】 ・学部再編による大きな異動があらかじめ予想されているので、これに対応して組織の適切性を検証できる。
	【特色】 ・同じ専攻とは思えない多様な人材を育成可能である。	【特色】 ・教員歴の長い経験豊富な指導教員を配置することができる。	【特色】 ・各専門分野において新進気鋭の研究者を確保している。	【特色】 ・学部学生時代から継続的に指導体制を整えることができる。	【特色】 ・現状における人材登用予定分野が明確である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・専門分野内の教員数を十分に確保することが困難な場合がある。	【問題点】 ・短期的な状況変化に対応することが難しい。専攻内での教員配置、年齢構成に問題がある。	【問題点】 ・短期的には指導体制が整備されたものの、複数体制による指導が行き届いていない分野もある。	【問題点】 ・常に内部昇格者を確保することができ るわけではなく、分野によっては厳しい状況にあるところも見受けられる。	【問題点】 ・人材を補充すべき分野は明確であっても、有資格者を簡単に確保することはできない。
	【課題】 ・ある程度長い目で見て専門分野ごとの教員の育成を図る。	【課題】 ・外部からの人材導入も含め、時につなぎ的な人事体制を構築する必要性も考えられる。	【課題】 ・各分野において、できる限り昇格者による指導体制構築が求められる。	【課題】 ・学部人事の編制に際しても大学院組織のことを十分に考慮してもらうよう配慮をお願いする。	【課題】 ・内部登用だけでなく、一時的には外部からの適格者の確保が必要である。
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針		◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの、◆教務職員資格審査基準及び関連書類、	

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名畜産学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学院講義の内容・重複など、これまでのカリキュラムを見直し、カリキュラムの改正を実施し、研究室ごとの機関科目を中心に、外部講師による特別講義などを新たに配し、平成30年度から運用を開始している。	畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定している。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展を知り、多重なサポート体制を作り、切磋琢磨する環境を整備している。	各教員が成績評価を適切に実施し、学位取得のための口頭発表審査会は専攻内の指導教授全員が出席できる日程を選定し、全体で学位授与の決定を実施している。	大学院に進学した時点で、専攻説明会において学位授与方針を説明している。また、年2回の畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションにより、担当指導教授以外にも複数の専攻内の教員で学習成果を把握、評価している。	授業担当者は大学で実施している授業評価アンケートの結果を考慮し、講義内容の改善や向上を試みている
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・畜産学に関するより幅広い最新知識を得られるようにしている。	【長所】 専攻教員全体で大学院生へのサポートが可能である。また、研究室外学生との交流により、新たな発想を得る機会となっている。	【長所】 偏りの無い評価を行うことができる。	【長所】 特になし	【長所】 担当者をできる限り複数にすることで、自己点検のみならず教員相互の点検が可能となる。
	【特色】 ・特別講義を多く実施することで、畜産の専修分野を幅広く俯瞰した最新の専門知識の習得が可能になった。	【特色】 大学院生同士のディスカッションにより、切磋琢磨できる。	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	◆大学院シラバス、◆大学院学生便覧、◆履修ルールやモデル、◆特別講義実施記録、◆専攻3ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆大学院シラバス、◆学位論文審査基準、◆口頭発表審査会実施記録	◆専攻説明会実施記録、◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録、◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学院入試説明会の際、大学院進学希望学生全員に対し、アドミッション・ポリシーおよび入試制度について説明をしている。 入試の点数や順位などは、指導教授全員で確認を行い、公正に実施している。 推薦入試制度を導入し、年度早期の入学試験の機会を増やす試みをしている。 なお推薦入試については来年度は行わないこととした。これは実施時期が5月となり、学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難であること、GPAに下限を設けると農業高校出身者や、万能ではないが専門に優れており、進学後に成長が見込まれる者を救い上げることが出来なくなり、当専攻が考える推薦入試のメリットが無くなったためである。	平成30年度より新たなアドミッションポリシーのもと新カリキュラムが始まっている。今後も授業評価や学内での研究進捗プレゼンテーションを通して全指導教授が個々、あるいは相互に各研究体制の現状を点検、評価していく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・専攻の教員全体で大学院生の研究の進展を知り、多重なサポート体制を作り、切磋琢磨する環境を整備している。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆専攻3ポリシー、◆大学院入試説明会の実施記録（参加者数等含む）、◆大学院入試志願者数表	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆研究進捗プレゼンテーション実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	各専門分野に適切な人員を配するとともに、若手教員が大学院授業担当者に昇格できるよう、各指導教授および若手教員自身に積極的に周知している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	大学院授業担当者を増やすことで、大学院教育研究活動の更なる向上を目指している。	専攻の各指導教授に対し、昇格申請の案内を積極的に実施している。	半年に1回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定している。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握する機会を設定している。	学部再編に伴い、できる限り適切な人員配置になるよう努力した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・各専門分野に複数の指導教授を配することが望ましい。	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・学部の編成が優先され、本専攻にとって必ずしも最適の人材を確保できていない。
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・昇格が停滞する場合には外部から臨時の指導体制を構築するなどし、昇格を促す必要がある。	【課題】 ・特になし	【課題】 ・専攻教員全体で議論し、組織の適切性を判断し改善できる場を設定する必要がある。
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオセラピー学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	③	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	■ している □ 一部している □ していない	■ 講じている □ 一部講じている □ 講じていない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない	■ している □ 一部している □ していない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	バイオセラピー学専攻の理念の理解と会得を進めるために、専修科目の統合を進め、必修科目の特論および選択必修科目の演習を設定した。	各専修において実験・実習を充実させるために新たな実験・実習科目（バイオセラピー学発展実験・実習 4 単位）を設定し、必修科目に設定した。またプレゼンテーション I、II については修得方法を明示し、学生の発表能力の向上を進めた。	各年度始まりの専攻ガイダンスにおいて新入生および在學生に講義、演習、実験・実習科目の内容について説明し、単位の取得について説明を行った。単位認定と学位授与の評価については、専攻内で大学院セミナーを開催し、専攻全体で各学生の研究の進捗状態を把握し、さらに中間発表会により適切な指導および評価を実施した。	大学院セミナーを開催し、専攻学生全員の当番制の発表を実施した。これらの参加および発表によりカリキュラムに設置している科目（プレゼンテーション I）を単位認定し、評価を行った。また中間発表会を1年次終了前に実施し、研究の評価を行い、単位として認めた（プレゼンテーション II）。	学生の研究動向を適切に理解し、指導するために専攻内独自に大学院セミナーを開催した。学生は必ず発表および討議に参加することを義務付け、研究状況の把握を行い、専攻全体で各学生に適切な研究・教育指導が行われているか、点検・評価した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ディプロマ・ポリシーの内容に一致する学問体系作りが進められた	【長所】 ・学生が専攻した専修について、総合的に理解を深めることができた。客観的な発表能力が向上した	【長所】 ・セミナー開催により各自の専修以外の教員の意見を聞くことができ、専攻全体で各学生の研究内容を把握できた	【長所】 ・ディプロマ・ポリシーに配慮した単位取得が可能になった	【長所】 ・適切な教育指導が行われているか、把握できた
	【特色】 ・専攻学生全員が全専修科目を学ぶことによりディプロマ・ポリシーを達成することが可能になった	【特色】 ・専攻および専修の理念をより明確にすることができた	【特色】 ・研究の質の向上および進捗状態を専攻全体で理解できた	【特色】 ・学生が常に研究に対する問題意識を持つことが可能になった。	【特色】 ・学生の健康状態を含め、現状を専攻全体で把握できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 授業および満足度アンケートによる結果より、就職活動に関する教員からの助言が少ない、キャリアセンターによる就職支援プログラムなどの参加が低い	【問題点】 ・専攻学生全員の中間発表会の時間の設定が難しい	【問題点】 農学部改組により組織変更に伴い、専攻教員の共通した理念の希薄化	【問題点】 授業および満足度アンケートによる結果より、自主学習への指導不足 図書館やその他の施設などへの不満
	【課題】 ・特になし	【課題】 専攻学生への教員やキャリアセンターへの要望をガイダンスでの問いかけ専攻とキャリアセンターと協力した厚木キャンパス独自の就職支援プログラ	【課題】 ・口頭発表では時間が設定できなかったため、ポスター発表で実施した。修士論文発表会に際しては二日にわたり実施する必要がある	【課題】 ・大学院セミナーへの教員の積極的な参加 ・従来行っていた大学院セミナーの開催形態を2019年度より変更	【課題】 シラバスの内容および授業のための予習・復習に関する記述を充実させる。 図書館などの施設の改善は困難であるが、図書や文献の充実化を進めるためにガイ

平成30年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式1

		ムの開催			ダンスでの問いかけ
根拠資料名	◆専攻会議議事録（資料 6-3）、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆大学院カリキュラム、◆専攻3ポリシー	◆専攻会議議事録（資料 6-3）、◆大学院学生便覧、◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス	セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻ガイドダンス実施記録（資料 4）、◆中間発表会実施記録（資料 3）	セミナー開催記録（資料 1）、◆中間発表会実施記録（資料 3）、◆専攻3ポリシー	セミナー開催記録（資料 1）、◆専攻会議議事録（資料 6-3）、シラバスの改訂（資料 9）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	バイオセラピー学科の募集停止により、専攻の運営が今後の課題である。 大学院セミナーを開催し、学部学生に対して大学院進学希望者の増加、また推薦入試の導入により優秀な学生確保を進めた。 試験科目の選択に当たっては、受験生の科目の選択肢を増やすために各自の専修科目を必修とし、他の選択科目については試験当日に選択出来るように全専修の試験問題を作成してた。 ◇第5回専攻内会議にてH32年度推薦入試の実施について検討し、バイオセラピー学専攻では実施しないこととした。	バイオセラピー学科の募集停止により、専攻の運営が今後の課題である。 アドミッション・ポリシーに沿って、入学前に専攻内の研究教育指導の状況を理解させるために、学部学生にも聴講できる大学院セミナーを開催した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・推薦入試の導入により進学者の確保ができた。試験科目の選択肢が広がったため受験がしやすくなった	【長所】 ・学部学生に、各専攻の研究状況と方向性を理解させることができた
	【特色】 ・多様な学生を受け入れることが可能になった	【特色】 ・学部学生、専攻学生および教員との情報の共有性が高められる
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院セミナーへの学部生参加が少ない	【問題点】 ・大学院セミナーへの学部生参加が少ない
	【課題】 ・各研究室での大学院セミナーへの参加を推進する ・開催形態を検討する	【課題】 ・各研究室での大学院セミナーへの参加を推進する ・開催形態を検討する
根拠資料名	◆専攻会議議事録（資料6-3）、◆大学院入試募集要項、HP等、◆セミナー開催記録（資料1）、◆専攻3ポリシー	セミナー開催記録（資料1）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部学科の理念に適った教員配置に基づき教員を研究室に配置している。 1. 農学を基盤とした生き物・環境・人とそれらの関係性に関する理解を有する教員 2. 人の健康と福祉に資する福祉農学の発展に寄与する意欲を備えた教員	バイオセラピー学科の募集停止により、今後教員組織再編は困難である。教員数の減少は研究教育の質の維持に大きな課題である。新農学部への再編にあたり、学生への教育の質を高めるために、研究室間の枠組みを超えた教員間の協力体制が必要である。学部学生の研究室配分の調整および定数教員の研究室への受け入れ学生数の増加などを実施し、教員の負担軽減を行っている。	これまでは退職教員の補充には当該専修に将来的に必要な人材を採用してきた。また指導准教授への昇格および専攻内教員には指導教授に適合する業績の確認をすすめた。	大学院セミナーを開催し、学生の研究発表および論文紹介により指導教授の教育指導が適切に行われているか、専攻全体で確認した。	バイオセラピー学科の募集停止により、今後教員組織再編は困難であるが、研究室間の研究理念および内容の相互理解を進めるために大学院セミナーを活用した
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学際的な要素が強い教員組織編成ができた	【長所】 ・専攻内での研究教育の質の確認ができた	【長所】 ・採用に当たっては専修の将来構想が明確化した	【長所】 ・指導教授の教育指導の適切性を確認できた	【長所】 ・研究室の枠を超えた研究および理念を理解できた
	【特色】 ・多彩な人材からなる教員	【特色】 ・専攻内の現状把握ができた	【特色】 ・専修の活性化	【特色】 ・学生と指導教授の相互理解度があきらかになった	【特色】 ・専攻および専修の教育・研究方針の理解が深められた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教員の中途退職や定年退職による教員の減少	【問題点】 ・指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 ・指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 ・農学部改組により組織変更に伴い、専攻教員の共通した理念の希薄化	【問題点】 ・農学部改組により組織変更に伴い、専攻教員の共通した理念の希薄化
	【課題】 ・教員の補充が無い中での教育・研究の質の維持	【課題】 ・指導教授の確保および授業担当教員の配置	【課題】 ・学部改組後の新体制に伴う教員の配属と配置	【課題】 ・大学院セミナーへの教員の積極的な参加 ・大学院セミナーの開催形態の変更	【課題】 ・大学院セミナーへの教員の積極的な参加 ・大学院セミナーの開催形態の変更
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針、◆学科（専攻）教員配置表専攻会議議事録(資料 8)	◆専攻会議議事録(資料 6-3)、◆学科（専攻）教員配置表専攻会議議事録(資料 8)	◆専攻会議議事録(資料 6-3)	◆専攻会議議事録(資料 6-3)、セミナー開催記録（資料 1）	セミナー開催記録（資料 1）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・特論実験・特別演習・特別実験・特別研究の必修科目のほか、分野横断的な選択科目（生命情報科学・分子細胞生物学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。特に分野横断型選択科目については、積極的に学外の第一線の講師を呼んで、講義を行っている。	教員、学生間また学生同士の交流を活性化するため、ポスター形式による専攻全体での中間発表会、懇親会などを行っている。	学生の活動率評価、中間報告会、修論発表会等により評価する。	研究室毎のゼミ、授業の習熟度および、専攻全体の発表会に基づき評価している。	研究室毎のゼミ、授業評価等に基づき、全所属教員により定期的に点検・評価し、その結果について専攻会議で慎重に議論し、教育課程の内容と方法を決定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・先端研究の知識、技術を身につけられる点。	【長所】 学生自身の自主性を尊重する点	【長所】 特になし	【長所】 グループだけでなく個人とのディスカッションを通じてきめ細かな指導を行っている。	【長所】 特になし
	【特色】 ・外部講師等、学外の情報も積極的に取り入れられる点	【特色】 学部からの内部進学生が多く学生間の交流が活発な点	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院学生便覧、大学院シラバス、学外講師一覧、専攻3ポリシー	中間発表実施記録、懇親会実施記録	中間発表実施記録、修論発表会実施記録	専攻全体の発表会実施記録、専攻3ポリシー	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッショ・ポリシーに基づき、生命科学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。大学院進学後に必要な学力を評価するために分子生物学、英語を試験科目として科しており、これらの筆記試験に加え、複数の教員による面接を実施している。全ての科目の試験後に専攻長を中心とした専攻教員全員による入試判定委員会により公正かつ客観的に選抜している。	試験後に選考会議を実施し、専攻の教員で十分に議論した上で選抜する。また研究室毎のゼミだけでなく、中間発表会より専攻全体で適切性について判断する。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・受験生とは選抜試験前からコンタクトを取り、進学後や卒業後の進路についてディスカッションを行っている。	【長所】 ・一人の学生の教育に複数教員が関与するため公正に点検、評価できる点
	【特色】 ・面接では専門知識だけでなく人柄も確認できる。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	大学院入試募集要項、専攻3ポリシー	中間発表実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	設置の趣旨に基づき、学科の専任教員を配置している。専任教員の採用は、原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢などの資質を明記している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	指導教授として文部科学省の設置基準を上回る教授13名を配置しており、十分な教育、研究指導を行うことができる。	専攻の教授により構成される人事委員会により以下の根拠資料に基づき実施している。 今年度は新学部設置に伴い、新任教員を採用した。また研究、教育実績を有する教員を昇任した。	自己教育評価、授業評価により、授業、研究指導、国際交流、大学運営、課外活動、学外活動を評価している。また、全学的なFD委員会にも参加をしている。また教員全員が原則として科学研究費補助金をはじめとする外部研究資金に申請することになっている。	学部改組に伴い、本専攻の教員組織に関しても教員体制を変更した。動物、植物、細胞分子機能の3分野の体制は維持し、それぞれの分野を専門とする教員を配置した。また授業担当に女性教員を二名増員し、より細やかな女子学生への対応が可能となった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・生命科学の幅広い分野を網羅できる教員の配置	【長所】 ・動物、植物、細胞分子機能の3分野にバランス良く教員を配置している点	【長所】 ・人事委員会による教員体制の定期的な確認	【長所】 ・外部研究資金の獲得推進	【長所】 ・3分野に各2研究室というバランス良い教員体制
	【特色】 ・同上	【特色】 ・適切な年齢、職位バランスを考慮した採用、昇任を行っている点	【特色】 ・各活動の点数化による明確な昇格目標の提示	【特色】 ・外部研究資金への申請	【特色】 ・複数の女性教員の配置
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	学科（専攻）教員配置表	学科（専攻）教員配置表	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	科研費等外部資金申請状況	学科（専攻）教員配置表

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農芸化学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。また、新研究科設置申請に伴い、新研究科のカリキュラム・ポリシーに合致するよう検討した。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価する。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状、教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・最新の知見や研究手法のインプットから研究発表によるアウトプットまでを総合的に身に付けさせることができる。	【長所】 研究室教員と各院生間で定期的にディスカッションをしており、研究だけでなく生活面のサポートも可能である。	【長所】 なし	【長所】 専攻全体での発表会では、他分野の教員との議論も加わり、研究課題に対するより本質的な理解につながる。	【長所】 なし
	【特色】 ・外部講師による講義も豊富で、学外の情報を積極的に取り入れられる。	【特色】 研究室規模が比較的大きく、学生間での情報共有や切磋琢磨する機会にも恵まれている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 ・なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー			中間発表会（資料A）、および最終発表会（資料B）実施記録、◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッショ・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている。大学院進学後に必要となる学力を評価するため、分子生物学、選択科目（有機化学または無機化学）、英語を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。合否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。2期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学力だけでなく、研究に対する意欲や卒業後の進路に対する考え方を含めて把握することができる。	【長所】 ・専攻全体で審査が行われるため、公正な点検、評価が期待できる。
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP等、◆専攻3ポリシー	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	新研究科設置に向け、専攻主任、学科長を中心に検討を行っている。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	今年度の新規募集は予定されていない。 昇任については、大学の審査基準に照らして適切に行われている。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。また、留学制度を利用した教員の海外留学も推進しており、次年度に1名留学予定である。また、他大学・民間企業等との共同研究（44 件）や外部資金獲得（36 件、うち科研費 11 件）を積極的に行っている。	日常より専攻主任・学科長を中心に教員組織の編制について話し合いを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・外部資金獲得による研究教育環境の充実	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・各活動の点数化による明確な昇格目標が提示されている	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	学科（専攻）教員配置表（資料 G）	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	共同研究及び外部資金獲得状況（資料 F）	

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論科目（コースワーク）と特別実験・特別実習（リサーチワーク）を適切に組み合わせ、醸造学の学位授与方針に掲げた能力を身に着けるための教育課程になっている。	中間発表会はポスター形式で行い、専攻内学生間、および学部学生や教員とのディスカッションや学術交流を促進している。	成績評価方法、評価基準、修了要件、学位審査基準はシラバスに明示されており、適切に学位授与を行っている。学位審査及び修了認定は専攻内全教員出席の最終プレゼンテーションおよび専攻内会議にて客観的かつ厳格に行っている。	専攻内における発表会、学会発表、学会参加状況、学術論文投稿状況等から総合的に学習成果を評価している。	授業評価アンケート回答率向上のため各教員に担当学生へアナウンスすることを徹底している。中間発表会の実施時期と実施形式について専攻内会議でその都度検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】2年次6月に中間発表を行うことで、まとまった研究成果についてのディスカッションが行え、具体的なフィードバックが行える。	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 次年度在籍 M1 は 31 名（今年度は 16 名）であり、ポスター発表の会場や実施方法についての検討が必要。	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	◆専攻3ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、	◆中間発表会の連絡(資料・基 1-②)、	◆大学院シラバス、◆最終プレゼンテーション実施記録(資料・基 1-③)	◆発表会実施記録(資料・基 1-②、資料・基 1-③)、◆学会発表、学会参加状況及び学術論文投稿状況等(資料・基 1-④)、◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・醸造業をはじめとする微生物利用産業に興味を有し、それらにおける研究能力を向上させ専門職業人として貢献することに意欲的であることを学生の受け入れ方針に掲げ、学生募集及び入学選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施している。アドミッションポリシーに即した基礎学力を評価するため生物化学（一般および微生物生理）と英語を入試科目に科している。 ・H32年度に推薦入試を実施することについて検討し、醸造学専攻ではGPA3.0以上を出願基準とし定員を8名とする案を提出した。	・研究が自分自身の入学者選抜の適切性について専攻内会議にて議論している。 ・大学院入試の合格者数を増やしたいが、合格最低点を下げると質の低下を招くため、受験生の学力を向上させる必要がある。現行の試験科目のうち「生物化学（一般および微生物生理）」は受験生にとって範囲がわかりにくく勉強しにくいのではないかと懸念から、試験内容はそのままに試験科目名だけを「生物化学（微生物に関すること）」に変更する案とした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・GPA3.0を推薦入試出願条件とすることで、学部生が成績を上げることのモチベーションが高まることが期待される。また、成績優秀者を大学院に囲い込める。	【長所】 ・試験科目を「生物化学（微生物に関すること）」に変更することで、受験生が範囲を定めて効率よく試験勉強に取り組めることが期待される。受験生の入試得点が上がれば、より多くの志願者を合格させることができる。「落すための入試」ではなく「勉強させるための入試」にする。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 新たに導入する推薦入試についての適切な運用が必要である。また、本入試制度について低学年次学部生へ適切にアナウンスすることで、GPAを活用した修学意欲の喚起につなげることができるようにする。	【課題】 新研究科の設立に合わせて、専攻のカリキュラムが変わることから、それに即した入試制度に見直す必要がある。
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP等、◆専攻3ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料(資料・基2-②)

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	東京農業大学の求める教員像、東京農業大学大学院農学研究科教員組織の編制方針に基づき、醸造学専攻教員組織の編制方針を策定している。	醸造学専攻の主要科目である酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の各特論に指導教員を配置し、本専攻の教育研究活動を展開するため適切に教員組織を編制している。	・醸造学専攻の教育・研究の将来計画に基づいて教員の募集、採用、昇格等を適切に行っている。 ・教員の昇格の準備状況について聞き取り調査した。将来計画に基づき、3名の授業担当者を大学院指導（准）教授に昇格した。	・学生課主催のハラスメント講習会、学内FDフォーラムに積極的に参加し、教員の資質の向上を図っている。 ・学科内で職階ごとにハラスメント防止のための方策を協議している。	・研究室内の指導体制や教員組織体制について専攻内で議論している。学生からの聞き取り調査も行い、問題があれば対処できる体制をとっている。 ・大学院関連の会議報告や連絡を専攻会議だけでなく学科会議でも行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 ・教員各自がハラスメント問題への意識が高まった。	【長所】 ・会議の頻度が増えることにより教員組織の意思疎通の向上が期待される。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 新研究科設置を踏まえて適切で確実な実施を行う必要がある。	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名			（人事案件なので専攻には書類がありません）	◆職階ごとにハラスメント防止のための方策(資料・基 3-④)	◆学生からの聞き取り結果(資料・基 3-⑤)

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名食品栄養学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☒ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	前期課程では、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された(1)、(2)、および(3)の各項目全ての授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力を涵養している。後期課程は、公表している教育課程の編成・実施方針に記載された(1)の項目に記載された授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力の向上に向けて適切に運用されている。	先端関連分野における外部機関所属研究者を招いた特別講義を開催し、研究の活性化を促進している。また、応用生物科学部関連4専攻による教育改革に向けたグローバル学術リーダー養成プログラム」に参画し、研究に対する興味・海外留学への興味を促す。	卒業・修了要件に関しては、学生便覧等に明示している。論文審査に関しては、修士は「公開審査会」、さらに合議制の「専攻内審査会」により審査を実施・承認している。博士学位論文審査は、必要な論文数を明示し、さらに、「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」開催による審査を実施している。審査結果は、研究科委員会で報告し、承認を受ける。	博士前期課程に対しては、教育・研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、総合的に(1)学力、(2)論理的思考、(3)問題解決能力、および(4)コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を評価している。また、博士後期課程に対しては、研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、要求される(1)体系的知識と分析力、(2)問題解決に向けた指導的能力、および(3)国際的な発信力を評価している。	学習成果の測定は実施していない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】
根拠資料名	平成30年度大学院授業実施報告書 評価報告2018、◆専攻3ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス	2018 大学院食品栄養学特別演習一覧(資料1) H30 海外研修プログラム案内(資料2) 2018 海外研修報告(資料3)	大学院 農学研究科 学生便覧2018 大学院農学研究科委員会議事録 ◆学位論文審査基準、◆「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」の実施記録(資料4～10)	◆学位授与方針に関する評価基準(資料11)、◆専攻内の「審査報告会」の実施記録(資料8～10)	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☒ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーとして、入学前の (1) 学習歴・学力水準、(2)、(3) 入学希望者に求める水準等の判定方法、(4) 能力を設定し、ホームページ上で適切に公開している。受験生募集は、インターネットなどにおいて学生の受け入れ方針を明示して実施している。入学者選抜制度は、学内推薦入試と学内外の受験生の公平性を担保したⅠ期とⅡ期の一般入試により適切に設定されている。入学者の選抜は、全ての入学試験において専攻内の研究指導教員より構成される入試選考委員による面接、ならびにその後の専攻主任教授を長とする入試選考委員会の公正な審査を経て適切に行われている。H32 年度推薦入試については、専攻内会議で応募要件（GPA 2.7 以上）などを再検討したが、次年度も現行のままの条件で行うこととした。 2020 年度度推薦入試の実施については、1 月開催の専攻主任会議において研究科全体で最終確認をし、本専攻を含む 6 専攻で実施することで承認された。	点検・評価は、実施していない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻3 ポリシー、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試選考委員会実施記録（資料 12～16）、◆1 月専攻主任会議議事録	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☒ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農学研究科および食品栄養学専攻の教員組織の編成方針は、本学のホームページ上に公開している。	教育上主要と認められる食品栄養学特論ならびに人間栄養学特論の必修の特論科目に関しては、指導教授ならびに指導准教授が担当している。また、柱科目である選択科目の特論科目に関しては、すべての科目に少なくとも1人以上の指導教授あるいは指導准教授が担当しているなど、適正な配置が行われている。	専攻における人事計画に沿って、「大学等の設置基準」をもとに適切な職位ごとの充足を行っている。また採用・昇格に関しては、東京農業大学教員資格審査マニュアルに則り「5年以内の責任著者としての3報以上を有する」ことの実施など、厳格な運用が行われている。	前学期・後学期に実施される授業アンケートの結果を大学院担当教員に回覧することで共有し、そこから問題点を抽出、適切な改善計画の策定を行ったうえで、適切に実施している。	実施していない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・「5年以内の責任著者として最低3報」をコンスタントに維持することが難しい点。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・中長期の人事計画のみならず、組織改革など突発的な事象にも対応可能な論文作成計画を立案する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料17）、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料17）、◆専攻人事計画書（資料18）、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	2018F及び2018L 授業評価報告書 ◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書	

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 林学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施。	・研究テーマ、進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を実施。 ・大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において手厚く行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。	・学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 ・専攻内の中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差が生じないようにしている。	シラバスの内容の定期的な点検、授業計画・内容の検討を通じた教育の改善・向上を実施。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に寄与	【長所】 ・個別の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献	【長所】 ・各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上に寄与	【長所】 ・大学院生個別対応による学習成果の把握・評価の向上に寄与	【長所】 ・定期的な点検による教育の内容・指導方法の改善・向上に寄与
	【特色】 ・授業の計画・内容の向上に繋がる	【特色】 ・大学院生個別の状況に応じた修学の確保に繋がる	【特色】 ・大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる	【特色】	【特色】 ・定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通じた教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・一部大学院生に十分な指導が実現しなかった	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・複数の教員によるチームサポートの実現	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻 3 ポリシー	なし	◆学位論文審査に関する記録	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻 3 ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	入学者選抜の制度や試験科目等の見直しを実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。 5月の推薦入試の実施については、学生の進路がまだ定まらない時期であり時期尚早である。仮に実施するとしても、7月の一期入試時に併せて実施する方が現実的である。また、推薦入試によって、学生の質が維持できるかにも疑問が残る。	入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・社会情勢に対応しながら制度・体制を整備することが可能となる	【長所】 ・定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる
	【特色】 ・社会情勢の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる	【特色】 ・定期的な実施による PDCA サイクルを通じた改善・向上が期待できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・心理的ストレスを有する大学院生の増加。対応として専攻事務室にカウンセラーを配置いただき対応を図っている。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要。
根拠資料名	入試説明会の開催 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻 3 ポリシー	◆入試選考委員会実施記録等

平成 30 年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。	林学専攻教員組織の編成方針に基づき、4専修分野に区分しながら適切に教員組織を編成している。	専攻会議等を通して教員の募集、採用、昇任等を適切に行っている。	専攻会議等を通して教員及び教員組織の改善につなげている。	専攻会議等を通して教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員組織の編成方針作成による編制の明確化	【長所】 ・専修分野に対応した教員組織の明確化に繋がる	【長所】 ・会議を通じた情報の共有・議論の展開に寄与	【長所】 ・会議を通じた議論の展開に寄与	【長所】 ・定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・公平性・透明性が担保される。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの、◆専攻の教員編成方針	なし(指導補助教員として1名をH31年度から昇任させるが、個人情報のため提出できない)	なし	なし

研究科名地域環境科学研究科

研究科委員長名上原 万里子

専攻名農業工学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を確立し、地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門知識と、研究および論文作成手法を修得するための科目を体系的に配当し、コミュニケーション能力を増強できるカリキュラムを編成しています。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とし、コミュニケーション能力や問題解決能力を増強できるカリキュラムを編成しています。	セメスター毎に大学院授業評価を大学院課が中心となって受講生を対象に実施しており、農業工学専攻ではその結果を受けて優先的に対応すべき項目の洗い出しと分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した 改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続しています。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院教員全員（指導教員と授業担当者）の出席のもとに開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定しています。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録にいては、主査が作成した後、大学院全教員が確認の上で提出を行っています。	博士前期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに、農業工学に関する専門知識と研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における技術開発や問題解決に役立てる能力を備えた学生に修士の学位を授与しています。また、博士後期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し博士論文を提出するとともに、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に博士の学位を授与しています。	セメスター毎に大学院授業評価を大学院課が中心となって受講生を対象に実施しており、農業工学専攻ではその結果を受けて優先的に対応すべき項目の洗い出しと分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した 改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続しています。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・博士前期課程では農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者として、また博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力の確立を目指しています。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できています。	【長所】 ・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定しています。	【長所】 ・農業土木および農業機械分野の学問を基軸として、国内のみならず海外の現場での技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指しています。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できています。
	【特色】 ・地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修で構成しています。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・主査と副査のみならず、大学院教員全員（指導教員と授業担当者）の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価していま	【特色】 なし

				す。	
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまう問題点があります。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまう問題点があります。
	【課題】 ・必要に応じて教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を見直します。	【課題】 ・大学院授業評価に基づいた教育改善を継続していきます。	【課題】 ・必要に応じて学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を見直します。	【課題】 ・指導教員のみならず副担当も交えて、複数で院生の指導に当たり、院生の学習成果を適切に把握及び評価する体制を徹底します。	【課題】 ・大学院授業評価に基づき、教育課程及びその内容、方法の適切性の点検・評価に加えて、教育の改善・向上に向けた取り組みを継続していきます。
根拠資料名	・シラバス（資料1-1） ・専攻会議議事録（資料1-2）	・授業評価アンケート（資料1-3） ・専攻会議議事録（資料1-4） ・中間発表会レジメ（資料1-5） ・修論発表会レジメ（資料1-6） ・博論発表会レジメ（資料1-7） ・サマーセミナスケジュール（資料1-8）	・専攻会議議事録（資料1-9） ・発表会評価シート（資料1-10） ・審査会議事録（資料1-11）	・修士論文（資料1-12） ・博士論文（資料1-13）	・授業評価アンケート（資料1-3）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻では、以下の学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施しています。 博士前期課程では、農業工学に対する深い理解の上に、専門分野における基礎的な問題を自立的に解決できる人材を育成するため、以下のような学生を求めています。 1. 地球環境に配慮して食料生産の基盤づくりに寄与する農業工学に興味を有している。 2. 農業工学の専門領域における基礎的な知識・技術を有し、持続可能な社会の構築を目指し、地域資源の有効利用と循環型社会の構築に技術者として貢献したいという強い意欲を有している。 3. 地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門分野に関する研究に熱意を持って取り組むことができる。 また、博士後期課程は、農業工学に対する深い理解の上に、研究者または高度な技術者として自立し、専門分野において高度で独創的な研究能力を有する人材を育成するため、次のような学生を求めています。 1. 地球環境に配慮して食料生産の基盤づくりに寄与する農業工学に深い興味を有している。 2. 農業工学の専門領域における高度な知識・技術を有し、持続可能な社会の構築を目指し、地域資源の有効利用と循環型社会の構築に、研究者として、また高度な技術者として、貢献したいという強い意欲を有している。 3. 農業工学に関する高度な専門知識・技術を駆使して新領域の開拓に挑戦する強い意欲を有している。	セメスター毎に大学院授業評価を大学院課が中心となって受講生を対象に実施しており、専攻ではその結果を受けて優先的に対応すべき項目の洗い出しと分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した 改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次回の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続しています。 その結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っています。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指しています。	【長所】 ・大学院授業評価に基づき改善サイクルを継続しており、その結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っています。
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・工学分野では求人が多く、優秀な学生ほど大学院に残りにくい傾向にあります。	【問題点】 なし

平成30年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式1

	【課題】 ・キャリアセンターとも協力しながら、大学院進学、修学、修了後の道筋を明確に示すことにより優秀な学生の進学を促します。	【課題】 ・定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行うために、大学院授業評価に基づいた改善サイクルを継続していきます。
根拠資料名	・専攻の説明会の実施 HP（資料 2-1） ・募集要項（資料 2-2） ・入試 HP（資料 2-3）	・専攻会議議事録（資料 2-4）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制に関する方針として、農業工学専攻では、以下を明示しています。 農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業工学分野における保有する博士学位や高度な専門能力及び論文作成指導能力に加え、国際化に対応しつつ、人類が直面する農業農村開発と自然環境の保全との狭間で生じる地球規模の諸問題の複雑化に合わせて、多様な教育・研究を展開する教育体制を構築し、建学の精神「人物を畑に還す」のもと、国内だけでなく、世界各国、地域で活躍する優れた高度人材を育てることを目的として、農業工学分野における高度な専門的能力と学識を備えた研究者及び技術者を養成する研究室体制を構築し、その維持・向上に努める。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業工学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しています。	資格審査基準等に則り、適切に教員の募集、採用、昇任等を適切に行っています。	農業工学専攻では、平成28年度から30年度にかけて、東京農業大学教育改革推進プロジェクトの採択を受けて、「農業工学専攻におけるグローバル学術リーダーの育成プログラムの推進プロジェクト」を実施しています。 この取り組みは、農業工学分野におけるグローバルに活躍する学術リーダーの育成を目指したもので、そのグローバル学術リーダーの育成に向けた農業工学専攻の大学院教員の資質向上（FD）に取り組んでいます。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に点検・評価に取り組んでいます。

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・農業工学分野においてグローバルに活躍する学術リーダーの育成を目指したもので、そのグローバル学術リーダーの育成に向けた農業工学専攻の大学院教員の資質向上（FD）に取り組んでいます。	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・農業工学専攻では継続してグローバル学術リーダーの育成を目指しています。そのためにもグローバル学術リーダーの育成に向けた農業工学専攻の大学院教員の資質向上（FD）が必須となっています。しかし、関与の低い教員が存在しています。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・農業工学専攻の全教員が一定の質でグローバル学術リーダーの育成に当たれるように改善する必要がある。	【課題】 なし
根拠資料名	・専攻内指導教授会議事録（資料3-1）	・専攻内指導教授会議事録（資料3-1） ・大学院学生便覧（資料3-3）	・専攻内指導教授会議事録（資料3-1） ・教員公募書類（資料3-4）	・プロジェクト申請書（資料3-5） ・専攻内指導教授会議事録（資料3-1） ・授業評価アンケート（資料3-6） ・授業評価アンケートの結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書（資料3-7）	・基礎的事項に関する点検・評価報告書（資料3-8） ・授業評価アンケート（資料3-6） ・授業評価アンケートの結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書（資料3-7）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名造園学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	29 年度入学の博士前期課程 1 年生から新カリキュラムを実施し、選択必修科目の履修変更や必修科目「造園学総論」などを設定した。専攻内における専門性を高めるとともに、造園学の幅広さと社会的意味など体系的理解の強化、及び 9 月入学等の国際化に対応できるようにした。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。特に本年は、「教育改革推進プロジェクト」の予算の獲得による外国人教員の招聘を多く実施した（Hofstra 大学 Patricia Welch 教授、台湾東海大学黄章展准教授）。また、造園調査法詳論及びその演習では、海外協定校（中国北京林業大学）を訪問し、研究課題などを発表することによって交流し、造園学の修学意欲を高めた。	専攻内の教員が成績評価を行い、学位授与に際しては研究発表内容をもとに専攻内会議を実施して、十分な議論のもとに実施した。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。また専攻内の教員が院生の学習成果を個別に把握しており、研究について積極的に学会等での発表、投稿を行わせるように指導している。	授業の実施内容等について、少人数であるため大学院生との話し合いから進めることができた。研究環境、特に機材については大学院生が今まで以上に満足度が向上するような更なる取り組みが必要かと思われる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・造園学の社会的役割の再確認や専門性の深化を実施することができる。	【長所】 ・国際感覚を養うことができる。	【長所】 ・教員によって評価の視点が多様であり、評価が一面的とならない。	【長所】 ・学位授与方針が明確であるため、学習成果の評価を適切に運用できる。	【長所】 ・定期的な点検を行うことにより、専攻全体の学習状況や研究実績の状況確認が可能となる。
	【特色】 ・造園学のもつ広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴を理解することができる。	【特色】 ・院生自信の専門領域の確認や妥当性の検証ができる。	【特色】 ・多様な視点からの厳正な評価を行うことができる。	【特色】 ・明瞭かつ公正な評価が行われている。	【特色】 ・大学院生からの意見等も反映させ、適切性を可能な限り保てるよう努力している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・平成 29 年度から始まった博士前期課程の新カリキュラムについて、専門性と総合性のバランスを図る検討が必要である。	【問題点】 持続的な実施ができるようにする。	【問題点】 ・異分野の研究の場合、特に学位授与に際しては、検証が難しい場合も考えられる。	【問題点】 特になし	【問題点】 ・研究環境、特に機材の老朽化については、新年度に新たなものを導入する計画を立てている。

平成30年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式1

	【課題】 平成29年度から始まった博士前期課程の新カリキュラムについて、選択必修科目の必修化の検討も必要である。	【課題】 年々進む国際化へ対応できるような意識改革と実施が必要である。	【課題】 ・発表会、検討会、意見交流会などを通じ、今まで以上に論文の検証を継続的に実施することが必要と考えられる。	【課題】 より安定した明瞭かつ公正な評価の実施を行う。	【課題】 ・機材の老朽化については、継続的な検討を行い、より良い研究環境の確保に努めたい。
根拠資料名	履修・取得単位科目 ◆大学院カリキュラム①、◆大学院学生便覧①、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー①	◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④、◆外国人教員による授業実施記録⑤、◆造園調査法詳論及び演習実施記録⑥	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料⑦、◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④	◆発表会、検討会、意見交流会実施記録④、◆学会等での発表、投稿実績⑦、◆専攻3ポリシー①	◆研究環境、特に機材の導入資料⑧（ポータブル植物光合成解析システム等機器更新の資料）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	入試説明会や論文発表会への学部生の参加を促す一方、試験問題の開示を行い、公正に実施している。 2018年12月～2019年1月にかけて2021年度（H32年度）推薦入試の実施の検討を議論したが、造園学専攻では推薦入試を実施しないことに至った。	I期およびII期の2回にわたる入試時期に、その時の状況等について専攻内教員間で議論を行い、適切性について十分な議論と取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・早い時期から大学院進学に関する情報をあたえることにより、より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 ・入試の実施に伴い必然的に検討する機会がある。
	【特色】 ・学部生が早い時期から大学院の専門教育の実態や研究をめざす人材を発掘することができる。	【特色】 ・学力のみならず面接を実施することで、応募者の学生の研究に対する意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本学学内学部生の進学率も低い。これは高い学部生の就職率によるものである。	【問題点】 ・近年、留学生の応募者や受験相談者も少なくなく、研究能力が十分であるかなどの検証が難しい時が見受けられる。
	【課題】 ・社会とのバランスをみながら、長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内なども積極的に行う。 - また学部生に対しては、大学院教育や研究の魅力を、講義などを通して積極的に行う。	【課題】 ・受験希望者(特に学外からの留学生受験者)に対しては、可能な限り複数回、対面式で早い時期から相談などを行い、研究能力や修学の意味確認などをより密に実施することが重要かと思われる。
根拠資料名	◆入学数①、◆大学院入試募集要項、HP等①、◆入試過去問題HP①、◆専攻3ポリシー①	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように定期的な会議を開き議論している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	現在、学部教員に欠員が認められるため、教員組織の充実をまず先行する必然性がある。	9月下旬に学科内指導教授会議を開き、適切な教員配置について議論した。	国際的視野によって、本学造園学専攻の教育・研究方針をどうあるべきか、常に議論し、その方針に基づいた人員配置ができるように努めている。	9月下旬に学科内指導教授会議を開き、適切な教員配置について議論した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編制が充実すれば、それに伴って大学院の組織も充実する。	【長所】 ・優秀な教員の採用、昇格に伴い教育研究活動を展開することが可能となる。	【長所】 ・学部において、外国人教員の採用も図るように努め、今後の大学院教育の在り方を探った。	【長所】 ・自己点検結果を、学科内指導教授会議で確認した。
	【特色】 ・専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 ・新たな教員確保に伴い、大学院教育の充実が図ることができる。	【特色】 ・優秀な教員の採用、昇格に伴い専攻内の教育研究活動が活性化される。	【特色】 ・国際化を図る。	【特色】 ・造園学の特徴である制作やプロジェクトを通じた社会活動の評価・点検方法を検討する。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今後専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 ・今後、専攻内の十分な教員数の確保が困難な場合が想定される。	【問題点】 ・指導体制が整備されつつあるが、今後専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。特に造園学を修めた専門家の減少が危惧されている。	【問題点】 ・国内の造園の特色をどのように国際レベルで発信できるようにするのか、多くの議論が必要である。	【問題点】 ・学内での活動やプロジェクトの成果等の評価判定が難しい。
	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要がある。	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要と共に人材導入も含め、新たな人事体制を構築する必要性が考えられる。	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要と共に人材導入も含め、新たな人事体制を構築する必要性が考えられる。	【課題】 ・今後の学部人事の編制に際しても大学院組織と連携した人事体制を構築できるよう検討が必要である。	【課題】 ・外国人教員の招聘、海外での学習活動の機会向上を目指す。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆専攻の教員編成方針③a	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆指導教授会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの③b	◆指導教授会議での検討を示す議事録・資料②、◆外国人教員による授業実施記録⑤、◆造園調査法詳論及び演習実施記録⑥

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名国際農業開発学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教育課程の編成方針にしたがい、自然科学と社会科学、必修科目と選択科目、座学と実験・演習、フィールド調査などを適切に開設し、体系的に編成している。	各年度に 2 回、専攻合同の院生発表会を開催し、すべての院生が研究計画発表・中間発表・最終発表をおこなっている。	成績評価および単位認定は各科目の評価責任者が指導実施記録にもとづいて適切におこなっている。学位授与については、院生発表会における最終発表のあとで学位論文を審査する選考会議において判定している。	院生発表会におけるプレゼンテーションと学位論文によって、院生の学習成果を適切に把握し、相応の評価を実施している。	研究科のとりくみとして前・後学期に院生による授業評価をおこない、その結果に応じて専攻としての改善計画を研究科に提出している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・自然科学系科目と社会科学系科目を必修科目とすることにより、分野横断的な教育が実現されている。	【長所】 ・専門分野のことなる教員や院生を前にプレゼンをおこなうことにより、みずからの研究内容や研究姿勢を客観的に把握することができる。	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・ほかの大学院・専攻にはないマルチディシプリナリーなカリキュラムとなっている。	【特色】 ・専門分野のことなる教員・院生が一堂に会し、共通のテーマでディスカッションをくりひろげている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、実験・演習への対応が不十分となっている。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、院生発表会に参加できる時間がかぎられたものとなっている。	【問題点】 ・各学期の授業終了から成績評価提出までの期間がみじかく、提出されたレポートなどを評価する時間が十分にとれない。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、院生と個別に対応する時間が相対的にみじかくなっている。	【問題点】 ・本専攻は全院生のほぼ半数を留学生がしめているが、研究科の作成する授業評価では、留学生にはわかりにくい項目やミスマッチな設問が散見される。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、	院生発表会実施記録	◆院生発表会実施記録、 ◆論文審査選考会議議事録	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 院生発表会実施記録	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	年 2 回の入試でそれぞれ入試説明会を実施するとともに、ウェブなどを利用して過去の入試問題を公開するなど、学内外からの受験者に配慮した説明をおこなっている。入試においては各専門分野からの出題と複数担当（自然科学系および社会科学系）による英語問題の出題など、分野横断的な教育方針にそって筆記試験を実施している。口述試験は専攻内の全指導教員が担当し、各専門分野の観点から試問をおこなっている。また、留学生の増加に対応して筆記試験・口述試験とも日本語・英語のバイリンガルで実施している。	年 2 回の院生発表会でのプレゼンテーションで、院生の研究に対するとりくみを評価している。また個別の問題にかんしては必要に応じて専攻会議でとりあげ、専攻教員間で情報共有をはかるとともに、改善策を随時検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・2 期入試の時期が後学期の学位論文審査の時期に近接しており、入試業務にあたる一部の教員に過重な負担を強いている。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、専攻会議の開催に支障をきたしている。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP	院生発表会実施記録、 ◆専攻会議議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各専門分野(研究室)に指導教授を配置し、院生の研究指導にあたっている。授業においては指導教授にくわえて授業担当教員を配置し、教育・研究活動を展開するための適切な教員組織を編成している。	専攻のすべての指導教員と授業担当教員が出席する専攻会議において、人事計画が審議・決定されている。教員の募集、採用、昇任等は大学の規定にそって適切に行われている。	教員の資質向上は基本的に個人の努力に帰すべきものであり、専攻としては各教員が研究や自己研鑽に十分な時間をさけるよう、組織的かつ多面的な配慮をおこなっている。	専攻のすべての指導教員と授業担当教員が出席する専攻会議において、教員組織の適切性について随時検討をおこなっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、全体として大学院での教育・研究活動にさける時間が近年減少している。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、研究や自己研鑽にさける時間が十分とれていないのが現状である。	【問題点】 ・専攻において教員組織の適切性について検討をおこなっても、トップダウンによる組織改編や補職人事がしばしばあるため、実際の運営に反映することは困難である。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆専攻会議議事録 ◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆専攻会議議事録	◆専攻会議議事録

学部・研究科名	農学研究科
学部長・研究科委員長名	上原 万里子
学科名・専攻名	農業経済学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・農業経済学専攻では、具体的なカリキュラムポリシーとして、以下のように定めて教育課程を編成している。 （１）「農業経済学、農政学、食料経済学を基幹科目として配当し、修士論文作成のために、問題意識の醸成や研究方法・調査技術の修得が行えるよう特論および演習を必修科目として配当する」。これに対して、農業経済学、農政学、食料経済学の各特論と特論演習を配置し、大学院生はそれぞれの専門分野をセットで履修するよう指導している。 （２）「指導教授または指導准教授や論文指導教員以外の多様な研究方法や研究視点を学べるよう選択科目を配当する」。これに対し、上記の特論・特論演習科目のうち、専門以外の分野の科目を、研究計画や関心に応じて履修できるようにしている。 （３）「プレゼンテーション能力や議論の能力を高めるため、必修科目として総合演習を配当する」。これに対し、農業経済学総合演習（前期課程）および農業経済学研究総合演習（後期課程）を開設している。 （４）制度的な枠組みを学ぶため、農業法に関する科目を配当する。これに対し農業法特論Ⅰ・Ⅱを開設している。	・入学時および進学時の４月にガイダンスを行い、大学院生としての心構え、必要な手続きなどを説明している。 ・大学院生の論文を指導教員以外の教員の査読を経て掲載する学術雑誌『農経研究報告』を発行している。平成30年度の詳細については「包括的点検・評価報告書」を参照。 ・大学院生の研究室を13号館と18号館に各1室設置している。それぞれ学生どうしで交流が図れるようにしている。	・成績評価について学生が説明を求める場合は科目担当教員が面談等を行う。 ・総合演習の評価及び学位認定については、専攻全教員が参加する専攻委員会で判定している。総合演習の評価については1月26日の、前期課程の学位認定については2月18日、後期課程の専攻内における審査報告会は2月5日、その実施記録の承認については2月18日の各専攻委員会で行った。	・農業経済学専攻では、前期課程では、食料、農業、環境の農業経済学的側面にかかわる知識、農業経済学および関連分野において、研究者、教育者あるいは専門家として活動しうる能力、図表を効果的に利用しながら文章で適格に表現して、情報発信する能力等をディプロマポリシーに掲げている。後期課程では、農業経済学の専門領域における高い専門性を保証する国際的なレベルでの高度な知識、体系的に情報を整理し、論理的思考に基づく研究能力、食料問題・農業問題・環境問題等の解決に向け、リーダーシップ能力等を掲げている。これにもとづき、前期課程については、修士論文の中間報告会を3回、最終報告会を1回開催している。後期課程については、博士論文の中間報告会を3回、最終公開報告会を1回開催している。このなかで、指導教員以外の教員から、多角的にアドバイスを得ながら、必要な知識・能力・態度を身につけられるようにしている。さらに後期課程の最終学年においては、副査予定者が博士論文の研究指導者となり、上記の項目水準を満たせるよう指導体制を整えている。	・学生に対するアンケートに基づき、点検・評価を行うとともに、改善計画を立てて、向上を図っている。

平成30年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式1

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 農業経済学に関連した幅広い分野を学ぶことができる。	【長所】 1科目あたりの受講生が少ないので、受講生に合わせてきめ細かな授業を行っている。	【長所】 総合演習の評価・学位認定については、合議に基づいており公平である。	【長所】	【長所】 少人数で学生一人ひとりに応じた指導が可能となっており、比較的学生の満足度が高くなっている。
	【特色】 なし	【特色】 受講生に合わせて、英語または英語・日本語のバイリンガルでも授業を行っている。	【特色】 日本語のほか、英語での修士論文・博士論文の提出を認めている。	【特色】	【特色】
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】	【問題点】
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】	【課題】
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー	・ガイダンスの実施記録及び配付資料 ・『農経研究報告』の各号	・専攻委員会議事録	・各報告会の資料 ・審査報告並びに審査報告会実施記録 ◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	・農業経済学専攻博士前期課程では、具体的なアドミッションポリシーとして、経済学に関する基本的な学力、専門領域における知識や研究方法の基本的な学力、日本人は英語、外国人は日本語の基本的な語学力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、前期課程の学力試験については、基礎的科目・専門科目として、経済学・農業経済学・農政学・食料経済学から2科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲を判断している。後期課程については、専門領域における知識や研究方法、第二言語として英語または日本語のより高度な運用能力、研究資料を得るためにコミュニケーション能力を有するとともに、それらを緻密に整理できる能力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって率先して問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、学力試験については、専門科目として、農業経済学・農政学・食料経済学から1科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲のみならず、修士論文等の作成状況などを問うことで、受験生の能力を判断している。 ・学生募集については年3回説明会を開催し、アドミッション・ポリシーを用いながら、とくに外部からの進学希望者については丁寧に説明している。 ・個別の学力試験の採点結果は複数の教員が確認するとともに、専攻委員会で公正に選抜している。	・専攻委員会で入試科目やアドミッションポリシーの適切性について点検・評価を行い、数年に1回の割で改善を図っている。ただし、平成31年度入試については従来通りとなった。 ・現在、学生の在籍者数は定員を満たしていないが、反面きめ細かい指導が可能となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・留学生や社会人の受験希望者が比較的多い。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・受験生の数が低迷している。	【問題点】 ・
	【課題】 ・内部進学者を増やすために、学部のゼミや研究室を通じて、大学院進学 of 具体的なイメージを持ってもらうことが必要である。	【課題】 ・新専攻の分離に伴い、一部見直しが必要になるかもしれない。
根拠資料名	・試験問題及び解答用紙 ・専攻委員会議事録 ◆大学院入試募集要項、HP等、◆入試過去問題公表HP、◆説明会実施記録、◆専攻3ポリシー	・専攻委員会議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	・農業経済学専攻は、学科再編に伴い、食料環境経済学科と国際食農科学科に所属する教員で構成している。食料環境経済学科の6研究室および国際食農科学科の2研究室を編成し、各研究室原則として3名の教員で構成されている。平成30年度は、指導教授13名、授業担当教員6名となっており、男性16名、女性3名である。現在欠員になっている研究室があるため、平成31年度に向けて、早めに食料環境経済学科と連携して公募を開始し、教員の授業などの負担の軽減を図るとともに、指導体制の充実を図っている。	・新規教員の募集・採用については、食料環境経済学科と一体的に行っている。募集はすべて公募によって行い、本学および科学技術振興機構のホームページ等で公募情報を公表している。採用・承認については、大学の基準に従い、専攻委員会で審議を経て公平かつ適切に行っている。平成31年度中に4名の公募を行う予定である。	・各研究室の中で指導教授などが新任教員や若手教員にアドバイスをを行い、資質向上を図っている。また、平成30年7月と平成31年1月に全学的に行っているFDフォーラム、公的資金の利用管理に関する講習会、ハラスメント講習会などに各教員は参加し、資質向上を図っている。	・教員の研究室体制については、時代の変化や研究・教育上の効果を鑑みて、数年に一度、関係教員全員で検討を行い、研究室の再編を行ってきた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・社会科学の特性をいかし、学生は研究室の枠を越えて幅広く助言を受けられる。	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・新専攻の分離に伴う組織体制の検討。
根拠資料名	・専攻委員会議事録 ◆専攻の教員編成方針	・専攻委員会議事録、◆学科（専攻）教員配置表	・専攻委員会議事録 ・学科会議議事録、	・なし	・専攻委員会議事録 ・学科会議議事録

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名国際バイオビジネス学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・国内外の食・農・環境ビジネスに関する専門科目を配置している。 ・講義内容のシラバスへの反映、15 回開講の確実な実施している。 ・休講時の補講を適切に実施している。 ・最先端研究の知識などを得るため、不定期に外部講師による講義を実施している。	・調査・研究能力の向上を図るため、学期ごとに調査研究成果報告会を実施している。 ・柱科目の演習を必修科目として設置し、きめ細やかに指導している。 ・柱科目の演習では論文指導のみならず対外発表の指導も行っている。	・成績評価と単位認定は、農学研究科の評価基準に従って行っている。 ・学位授与は、原則として全教員が参加する学位論文報告会を開催し、絶対評価に基づく審査および完成論文審査により行っている。 ・中間発表会（プレゼンテーション）を実施している。	・専攻主任、主事がシラバスチェックを行い DP の整合性をチェックしている。 ・各学期において、指導教員が学生の取得単位数と成績内容を把握している。 ・調査研究成果報告会を通じて、個々の学生の総合的な研究能力を把握している。 ・指導教授が就職相談を実施している。	大学院改組に向け、カリキュラムと教員配置について点検し、新研究科のもとで本専攻の教育体系を継承・向上・改善するための検討を始めている。年度内にカリキュラム改訂を含む検討事項について結論を出す。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 食・農・環境ビジネスの理解やその調査・研究に必要な知識や能力が身につく。	【長所】 調査・研究能力の向上に加え、プレゼンテーション能力が身につく。	【長所】 成績評価、単位認定及び学位授与の客観性が保たれている。	【長所】 調査研究成果報告会での学生評価は、総合的な研究能力を把握する上で重要である。	【長所】 新研究科への移行を契機に、教育課程の改革を総合的に進めることができる。
	【特色】 ゼミ形式による少人数教育で、個々の大学院生に応じたきめ細やかな教育を行っている。	【特色】 日本語のみならず英語での報告・質疑応答もあり、国際性の向上に寄与している。	【特色】 全員の論文、報告内容、発表について点数化し、その結果をもとに成果を評価している。	【特色】 特になし。	【特色】 教員配置とカリキュラム、教育計画などを長期的視野のもと点検・評価し検討できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 授業等の関係で、参加できない教員もいる。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 新研究科への移行にともなう、ポリシー等の改訂、カリキュラム改訂を検討したため、これらを再確認する。	【課題】 学生間の討議を活性化し、個々の研究活動に対し学生が相互に刺激を与える場を創出していきたい。	【課題】 評価の点数化は実現できたため、評価と指導の連携が今後の課題である。	【課題】 学会活動を活性化し、国内・国外の会議における研究発表を推奨するよう指導する。また、相談記録作成を依頼する。	【課題】 改組にともない修正が必要となる教育目標やポリシーの再検討が課題である。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、専攻会議資料、◆専攻3ポリシー	中間発表会資料	中間報告の評価、中間発表会資料（個人が特定できるため部外秘）◆成績評価基準、◆学位論文審査基準	◆専攻3ポリシー	専攻会議資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・学生募集や入試にかかわる情報は Web ページにおいて公開しており、全受験者に公正に提供している。また、願書提出方法や奨学金情報にかかわる詳しい説明、さらには個々の志願者の質問への回答などのため、願書提出前に専攻単位の入試説明会を定期的に開催し、学生募集・入学者選抜における公平性を担保するための取り組みを実施している。 ・入試過去問題の公表、入試問題作成の内規の整備、口頭試験内容の標準化を専攻独自にルール化し、公正な入学者選抜に努めている。 ・多様な入試制度を導入するため、H32 年度以降の推薦入試導入することを検討している。	・ABE イニシアティブ、特別留学生など留学生の受け入れを積極的に行っている。 ・学生の適性について、個々の学生の評価・適性を専攻内で共有し、定期開催する報告会にて相互に点検・評価し、問題点の把握と改善を検討している。 ・一般入試のみならず、国際協力経験者入試、社会人入試、秋入学など多様な入試制度の受け入れを行っている。 ・留学生を中心に、学外の奨学金獲得に向け、応募書類作成の支援や推薦書作成を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 指導教授との進路相談などを通じて、研究計画策定など入学希望者の事前準備を重視している。	【長所】 個々の学生と緊密に連携し学生受け入れの改善に努めている。
	【特色】 特になし。	【特色】 学生指導では、指導教員と指導補助教員からなる複数教員による教育指導態勢を採用している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 日本人学生の大学院進学が少ない。大学院志願者数が減少傾向にある。
	【課題】 大学院改組、カリキュラム改訂にともない、入試科目の再検討が必要である。	【課題】 日本人学生の進学を促すため、学部授業において大学院進学をアピールすることが必要。 専攻の留学生奨学金枠が減少したことから志願者が減少しているため、学外奨学金を積極的に獲得するよう指導する必要がある。また、外部奨学金獲得の状況把握も困難であるため、報告を義務付けたい。
根拠資料名	専攻会議資料、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP、◆専攻3ポリシー	専攻会議資料、中間報告会資料、奨学金推薦資料（個人情報のため部外秘）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・指導教授による専攻委員会を不定期に開催し、指導教授推薦など教員組織編制の方針を確認し必要に応じて改善している。 ・学科や学部で教員募集を行った場合、常に大学院担当について意識しながら専攻人事の方針を決定している。	・学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 ・研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 ・教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	・教員の昇任は専攻会議にてはかり、指導教授により構成される専攻委員会にて適切に審議している。	・研究室単位で合同ゼミを行うなど、若手教員のFD向上がみられる。 ・専攻独自にFD研修会などは開催していないが、積極的に学内のFD講習会に参加している。 ・授業評価アンケートに取り組むよう、学生指導している。	・教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに点検・評価することを奨励している。 ・その結果、若手教員指導体制が確立している研究室が一部みられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針に基づき、英語で指導できる教員数が増えた。	【長所】 専任教員が減少しているが、継続して多彩な科目を提供している。	【長所】 研究室ごとに指導教授が存在し、研究室ごとに募集・採用・昇任を検討できる。	【長所】 特になし。	【長所】 特になし。
	【特色】 英語で研究指導するなど、国際性が向上した。	【特色】 英語で指導可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学部改組にともなう学科教員の減少が影響し、博士後期課程の教員配置に余裕がないことが懸念される。	【問題点】 すべての研究室が英語で指導しておらず、留学生の研究室選択に偏りがある。	【問題点】 博士後期課程維持のため嘱託教員を採用する必要がある、今後、教員年齢構成に偏りが出る可能性がある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 若手教員指導体制が確立しているのは、一部研究室にとどまっている。
	【課題】 指導教授として採用可能な嘱託教授の獲得が必要である。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 学位未取得の教員がいるため、学位取得を促す必要がある。	【課題】 専攻内FD担当を組織し、指導教授に相談できない問題学生の対応などを検討する。	【課題】 若手教員の研究力向上のため、海外留学の計画を検討する必要がある。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP等	専攻教員配置表、学生便覧、HP等	専攻会議資料 (合同ゼミ実施実績については、1研究室が毎週1回実施した、FD研修会参加者はいなかった)	専攻会議資料

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名環境共生学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	生物学、資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して、学位授与のための教育課程を編成し、各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育している。	定期的に行われる専攻会議において、各指導教授から、院生の研究進捗状況の報告を実施してもらい、問題がある場合、教員相互で意見交換を行い対策を立てている。	指導教授による院生への研究・教育指導を密に実施し、在籍3年目には、学位授与ができる体制を整えている。平成29年度は、3年生院生のなかで病気療養者が出てしまい、院生の研究が停滞し、学位申請ができないケースがあった。	自然・社会・人文科学を基礎とした総合科学分野の高いレベルでの研究能力を備え、環境共生型社会の実現のために社会貢献できるような研究に対して学位授与ができるよう実施している。	専攻会議および各専攻教員が定期的に点検・評価をし、改善・向上に務めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる。	【長所】 ・なし	【長所】 ・社会人院生に対しては、授業以外の場面でも、指導教授が指導体制を強化し、研究発表および学位論文作成の指導をし、成果を上げた。	【長所】 ・年2回のスクーリング授業を通して、院生相互の研究、教員の講演などにより学位授与方針に則った体制を整えている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる。	【特色】 ・なし	【特色】 ・年2回スクーリングによる研究発表会を実施しているため、専攻全体の教員が常に院生の研究情報を把握し、多角的に助言できる。	【特色】 ・本専攻の教員は、自然・社会・人文科学の多方面から優れた教員が集まっており、院生に対して様々な角度から研究指導ができる。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・社会人院生が多く在籍するため、指導教授との相談は密に行われているが、院生同士の研究交流の機会多くする努力が必要である。	【問題点】 なし	【問題点】 ・平成29年度は、3年生院生のなかで病気療養者が出てしまい、院生の研究が停滞し、学位申請ができず留年した。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし、研究交流を密にする。	【課題】 ・現状の継続	【課題】 ・29年度に留年した院生については、30年度学位取得に向け、指導教授を中心に専攻全体でバックアップしている。	【課題】 ・現状の継続	【課題】 ・現状の継続
根拠資料名	専攻会議議事録、授業実施評価報告書、研究発表会抄録、ガイダンス資料、大学院海外研究発表支援プログラム、◆専攻3P	専攻会議議事録、授業実施評価報告書	専攻会議議事録、授業実施評価報告書、研究発表会抄録、大学院海外研究発表支援プログラム	専攻会議議事録、授業実施評価報告書、研究発表会抄録、学位審査報告・実施記録、◆専攻3ポリシー	専攻会議議事録、授業実施評価報告書、研究発表会抄録、ガイダンス資料、大学院海外研究発表支援プログラム

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学全体で発信している募集情報だけでなく、専攻独自特色あるホームページから、とくに社会で活躍している経験と知恵と研究力を学位取得につなげる指導体制を整えていることをPRし、社会人特別選抜という入試制度を活用して、働きながら3年間で学位取得できることを実施してきた。さらに、仕事の関係で3年間では取得ができない院生には、入学当初から長期履修制度により対応できるように体制を整えており、順調に実施している。また、専攻の個々の教員も積極的に学生募集を行っている。	定期的に行っている専攻会議において、常に院生確保について教員相互で情報交換を行い、入学希望者に対して、事前に、研究体制として専攻内での研究指導教員の紹介と研究の方向性を指導した上で、入学試験が受験できるようなシステムを構築している。また、指導教授の他に、補助的に専門性をもつ他専攻の教員の指導も協力する体制を整備し、適切に学生が受け入れている。その結果、平成30年度受験生は6名（定員5名）で全員合格した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・とくに、社会人選抜試験入試制度を主体として、働きながら3年間で学位取得できることを、専攻独自のホームページに明記し、指導体制を明確化し、院生獲得に努力している。	【長所】 ・定期的に行われる専攻会議において、毎回、院生確保について教員相互で広く情報交換をしている。入学希望院生には、入試事前に、研究指導を行い研究の方向性を明示し、入試合格後、スムーズな研究体制、学位取得ができるように指導体制を確立化している。
	【特色】 ・専攻独自のホームページからも、とくに社会人選抜入試での学位所得のシステムがあることを明記していること。	【特色】 ・入学前、事前に綿密な相談・研究計画の指導をしているため、スムーズに大学院在籍中の研究活動が実施できる。平成31年度入学者および希望者は、すでに定員以上確保できる予定であり、本専攻において学位所得を希望するニーズが高い。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・現状の継続と院生確保のため、専攻教員の募集活動充実	【課題】 ・現状の継続
根拠資料名	専攻会議議事録，大学院入試募集要項，大学ホームページ，専攻独自のホームページ，入試問題作成，合格基準内規，口頭試験実施専攻内規 ◆専攻3ポリシー	専攻会議議事録，授業評価アンケートおよび改善計画書，入試合否判定会議記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本専攻は、自然科学・社会科学・人文科学と広い研究分野の院生を指導する体制を整備するため多方面の教員を配置している。しかし、退職者等の補充のため、現在の生物・資源・地域学の各分野の教員確保に苦慮している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	本専攻における自然科学・社会科学・人文科学のバランス良い指導体制を確保するため、教員の研究分野の見直しを行い、分野配置の再編成をおこなった。	平成 29 年度は、指導教授・指導准教授を増員するため、2 名の授業担当教員が指導教授に申請し、平成 30 年度から昇格した。専攻会議において、学内教員で大学院を担当していない教員の洗い出しを行い、専攻の研究に適合する教員に対して、専攻教員への要請・依頼を検討し、人事申請をおこなった。	専攻主任から、指導補助教員・授業担当教員には、常に研究業績をつくることを助言し、指導教授・指導補助教員を確保することに努力している。また、学内において、大学院を指導していない教員に対して、本専攻の指導を依頼する働きかけを行っている。専攻内において、教員および院生に向けて年 2 回研究講演会を実施し、教員の研究充実をはかっている。	定期的な専攻会議において、専攻内組織について検討している。今後の退職教員に対する研究指導体制の見直し等も行った。とくに、平成 29 年度退職教員が指導する院生が留年に伴い、指導教員の変更を実施し、平成 30 年度学位取得がスムーズにできるよう配慮した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ 院生の研究内容について、多方面から他の指導教授からのアドバイスが可能である。	【長所】 ・ なし	【長所】 ・ なし	【長所】 ・ 自然・社会・人文科学の広い分野での指導教員の受け入れが可能であること。	【長所】 ・ なし
	【特色】 ・ 環境共生学の分野において、広く自然・社会・人文と多方面で指導できる。	【特色】 ・ なし	【特色】 ・ なし	【特色】 ・ なし	【特色】 ・ なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ 現在の生物・資源・地域学における各分野の教員確保が困難になってきている。	【問題点】 ・ 今後の大学院の改組を考えると、各分野の教員の人員確保が困難になる可能性がある。	【問題点】 ・ 授業担当の若手の教員が少ない傾向にあり、今後の指導体制で人員不足に苦慮する。	【問題点】 ・ 様々な環境共生学の研究分野に対応できる教員確保が困難な状況である。	【問題点】 ・ なし
	【課題】 ・ 学内および学外からの環境共生学に関する研究指導できる教員を確保し、バランスの良い指導体制を確保する。	【課題】 ・ 今後の大学院改組を考え、分野等の再編成や教員の増員の確保が必要である。	【課題】 ・ 新任教員や学内から若手の教員を授業担当教員もしくは研究指導補助教員に採用し、今後の指導体制を確保する。	【課題】 ・ 今後も、現状で実施している教員確保に努力していく。	【課題】 ・ なし
根拠資料名	専攻会議議事録，大学院教員名簿，◆専攻の教員編成方針	専攻会議議事録，専攻主任から専攻教員への人事体制依頼文書，教員人事申請関係書類，教務職員資格審査基準関連書類，大学院教員名簿	専攻会議議事録，専攻主任から専攻教員への人事体制依頼文書，教員人事申請関係書類，教務職員資格審査基準関連書類，大学院教員名簿	専攻会議議事録，研究講演会抄録	専攻会議議事録，大学院研究科委員会への指導体制変更申請書類

学部・研究科名 農学研究科

学部長・研究科委員長名 上原 万里子

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本年度平成 30 年に開設した当専攻の現カリキュラムは文部科学省に届け出たものであり、カリキュラムポリシーに則って、食の安全と健康機能に関する問題解決力を身につけることのできる編成になっている。	英語論文購読という科目を設け、学生自ら英語論文を読み、理解し、教員、学生、院生の前で発表させている。また、食品安全健康学概論においては、最先端の研究について理解させるとともに、研究の進め方、研究での苦労も含め講義を学外の研究者を招いて行った。12 月 7 日に大学院生の研究説明会と題して、企業の方、大学生に各個人が自分の研究について、ポスターを用いながら説明した。	単位制度および学位授与は、1 年次に学生全員にガイダンスを 4 月 4 日(午前 11 時~12 時) に行い周知させた。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。	各科目において、進行過程で出席状況と理解度を把握し、必要に応じて適切な指導を行っている。また、科目の終了時には、レポートやプレゼンテーション等によって学習成果の達成度を把握し、適切な評価を行っている。	学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布し、次年度以降の授業に役立てるようにしている。 前期授業評価アンケートにおいて、内容の興味深さは 91%、取り組み方 91%、出席率 9 割以上が 91%だった。しかし、シラバスに基づいた講義、難易度の適切さ、授業時間以外の自主学習方法指導、知識の修得さについては 80%を割っていた。問題点、課題について、早急にまとめ、来年度に活かしていく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・食品関連分野の研究に必要であり、学部で学んだ以上に最先端の情報を取得、理解できる、また、自分の出した成果を他人に分かりやすく発表できるためのスキル、さらに、現在、世界中で問題となっている研究倫理についても学べる編成になっている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・大学院生の学部教育達成度に対する教員の理解不足。 ・大学院生とのコミュニケーション不足

平成30年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式1

	【課題】 ・なし・	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・授業のシラバス、難易度、予習・復習に関する指導、知識の修得度について十分な満足が得られていない。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリ	◆授業実施記録等、◆食品安全健康学概論学外講師一覧	◆大学院シラバス	◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学院課とともに、入試説明会、ホームページ、大学案内等にてアドミッション・ポリシーを公開している。専攻において、大学院課の指導のもと、入学者選抜会議を開催し、入学者選抜を行っている。	・毎年入学者選抜会議の際、学生受入の適切性について評価、検討している。来年度の入学者選抜に向け、本年度中にこれまでの反省点を踏まえて、学生受入方法について具体的に検討した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・推薦入試と一般入試の両方を設けている。推薦入試については、現状のとおり、6人の定員、また3年次までの成績がGPA2.7以上とした。 ・一般入試については、I期入試の定員18名(推薦入試定員を含む)、II期入試2名としていたが、来年度からI期入試定員14名、II期入試定員6名とした。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・推薦入試による入学者定員について、現状の6人でよいのか検討する必要があると考える。現在推薦要件としてGPA2.7以上としているが、この数値が妥当かどうかについても検討する。
根拠資料名	◆大学院入試募集要項、HP等、◆専攻3ポリシー、◆入試説明会ポスター	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	開設時、教員組織の編成方針を作成した。大学、農学研究科の教育編成方針を踏まえ、本学科の専門性である「食の安全」と「食の健康機能」に関する能力、教育に対する姿勢を明示している。	当専攻の指導教員は10名（うち女性3名）、指導補助教員は3名（うち女性2名）となっている。教員が担当する授業数においては多すぎないよう、適切な配慮がなされている。10年さらに20年後の専攻の状況を考慮し、各研究室の教員の年齢はバランスよく構成されている。	教員の職位ごとの募集、採用、昇任等は、学則に則って行っている。	大学で開催されるファカルティ・ディベロップメント研修会や各種ハラスメント講習会などに教員が積極的に参加しているほか、教員資質の向上や教員・教員組織の改善に有用な情報を常に入手し、専攻内会議等を通じて、教員間で共有している。	毎年度末に行われる全教員がそれぞれ自己点検・評価を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学生便覧	◆教務職員資格審査基準及び関連書類、		

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	学部との教育連携方法の検討
実行サイクル	5 年サイクル（平成29年～33年）
実施 スケジュール	大学院授業科目について、学部での関連授業科目との連続性を意識した授業内容の実施を検討するとともに、シラバスにおいてそのことを具体的に表現した記述を行う。
目標達成を測 定する指標	毎年のシラバスの改定に際して順次学部と授業との連続性を意識した表記を心掛ける。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学部での授業については基本的に導入的なものが多く、未知の領域に対して興味を抱かせるためのものであることが多い。したがって、より詳細な内容等に関しては後回しになる傾向が強く、深く内容を掘り下げる前に卒論研究等に取り組んでしまうため、専門分野についての広く深い理解が不足する傾向がある。今年度は農学部改組があり、学部での講義内容の変更が多く、学部との関連性を求めるには至らなかった。次年度以降の課題とする。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・現在の学部教育では、以前に比べると授業科目数が減少しており、専門教育のレベルが低下した感がある。このような中、学部学生が専門分野に関する知識技術の積み上げを具体的にみられるようになり、学部段階から徐々にステップアップさせ、大学院進学に際しての障壁を低く感じられるようになる。
	【特色】 ・大学教育が4年で完了とするのではなく、より多くの学生が6年一貫的教育を受けることが可能となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ステップアップの中で現場の問題等に触れる場合など、内部の教員だけでは指導が困難な場合もある。外部の専門家等の参加が容易に行えるような体制づくりが必要である。
	【課題】 ・平成30年度から学部改組に伴って新たに開講される科目や、より基本に立ち戻る内容となる科目が増加した。大学院の授業内容については、これらの状況を踏まえてより連携に注意した内容とする必要があり、次年度以降の課題とする。
根拠資料名	◆大学院シラバス

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	博士研究員制度の導入検討
実行サイクル	5 年サイクル（平成29年～33年）
実施 スケジュール	博士課程進学者を増加させるとともに、それに付随して課程修了者の中から順次博士研究員を確保する。また外部の適格者についても採用できるように検討する。
目標達成を測 定する指標	専攻内のいずれかの研究室（できれば複数）に博士研究員が在籍する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	現状、学部学生教育においてティーチングアシスタント（TA）制度という大学院生を活用する制度はあるが、実質的には単なる教育補助的な役割にとどまっている事例が多く、TAとして本格的な授業を行うに際しての研鑽はあまり行われていない。博士研究員は専門分野における高度な知識と技術を有しており、当の本人の研究はもとより、本来教員が対応すべきレベルの研究教育指導を行える可能性も高い。なお、平成30年度後期課程入学者については定員枠いっぱいの5名を確保することができ、博士研究員予備軍として大いに期待がもてるところである。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ 特定の専門分野について最新の知見や技術を有している者が研究教育に関与することにより、大学院や学部における研究教育レベルの向上が図れる。また比較的中長期的な研究にも対応できる。
	【特色】 ・ 博士研究員が大学院や学部レベルにおいて高度な教育研究指導を行うことにより、自身のキャリアアップを図ることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ 博士研究員としては外部からの優秀な人材を確保することも必要であるが、現在内部の博士後期課程に在学する大学院生を育てる必要がある。
	【課題】 ・ 博士研究員の供給元である後期課程大学院生を恒常的に確保していくことが求められるところであるが、平成30年度においては2名の修了者を得ることができた。1名は、残念ながら他大学ではあるがポストドクターとして研究を継続することになった。このような事例を増やし、修了者の研究意欲をより高めていくことが必要である。
根拠資料名	◆博士後期課程在学者及び入学予定者数等

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	連続して入学定員以上の入学者を確保する	新たな制度の導入によって定員枠が 2 倍以上に増大した推薦入試について。入学者確保に果たす役割を検証する
実行サイクル	3 年サイクル（平成29年～31年）	3 年サイクル（平成29年～31年）
実施スケジュール	平成29年度内に実施される入学試験から始めて、毎年入学定員以上の入学者を確保する。入学試験の種類には推薦，一般（Ⅰ期およびⅡ期）があるが，個々の入試の枠にはとらわれず，全体を通して入学定員枠以上の入学者を獲得できたかどうかを検証する	平成29年度実施試験から推薦入試の実施方法が変わり，これまでに比べてより多くの優秀かつ研究意欲の高い学生を早期に確保すべく，入学定員枠を大幅に増加させた。この入学定員枠をどれだけ維持できるかを検証する。
目標達成を測定する指標	個々の実施年度における入学者数が少なくとも3年間連続して入学定員以上となること。	本専攻の推薦入試志願者数が，推薦入試定員枠を3年間連続して満たすこと。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	本専攻の入学者数は，年によって入学定員枠を上下することが多く，博士前期課程 2 年間の通算では定員枠を充足していることが多いものの，個々の年で見ただけでは上下変動がみられる。なお，Ⅱ 期試験の実施時期については現状年明けとされているが，公務員や一般民間企業等への就職活動が一段落する 10 月・11 月あたりとして，早めに優秀な人材を確保しておくことも考慮すべきかと考える。今年度は定員を確保できた。	昨年度から引き続き、推薦入試には十分な志望者があり定員予定枠を満たすことが出来た。次年度以降も同様の状況となるよう，進学指導に力を入れていく必要がある。 学内推薦入試について新たに GPA2.0 以上の成績を対象者とすることが加わったが、農学選考では推薦入試を始めて以来、2.0 を下回る学生の合格者はおらず、妥当な基準と考えている。推薦入試で進学した院生の動向について継続した追跡調査の必要があるが、概ね優秀な成果を挙げている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・毎年定員枠以上の入学者を確保することにより，種々の研究テーマの継続性を保つことができ，そのレベルの維持・向上が図れる。	【長所】 ・学部在学の早い段階から専門レベルの指導を受け，その後の研究遂行に対して高い意欲を示す学生を早期に確保することにより，その後の大学院での研究テーマを継続的に実施することができる。
	【特色】 ・長期的な研究テーマをもつことにより，そこに派生してくる新たな問題を解決するため，幅広い研究テーマを生み出すことができる。	【特色】 ・長期的な研究テーマをもつことにより，そこに派生してくる新たな問題を解決するため，幅広い研究テーマを生み出すことができる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・大学院入学志望者数は，その時々を経済的な状況に大きく左右されることがあり，特に昨今のように好景気が続いている中では，学部卒業時点で優良な就職先を確保できることも多く，敢えて進学というリスクをとる必要性が失われてしまうことがある。 ・定員枠の確保は極めて重要な課題ではあるが，そのことにこだわるあまり不適格者を入学させてしまう可能性も考えられる。入学者選抜は慎重に行われるべきである。	【問題点】 ・入学志望者が希望する研究テーマについて，必ずしも細やかな対応ができない可能性があるため，志願者を確保できないことがある。農学専攻の特徴でもあるが、当該研究室が個別の学会所属となるような植物、動物、微生物など対象も研究手法も異なる分野の共同体である。今後、これらの多様性を生かした相互に協力した指導体制を考えていく必要がある。
	【課題】 ・大学院に進学し，さらなる教育研究の指導を受けることによって，学部卒業レベルでは到達できないより魅力的な進路を得ることができる事例をしっかりと示せるように，教育研究だけでなくキャリア教育を行うことが必要であり，そのためには教員サイドだけでなくキャリア課等事務方からの協力も求められる。	【課題】 ・指導教授が個々に独立して指導を行うだけでなく，関係する分野の指導教授以外の他の教員も含めた研究室全体での複数による指導を行うことなどにより，細やかな研究教育指導体制を確立することが求められる。
根拠資料名	◆志願者数表等	◆推薦入試志願者数表等

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名畜産学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院進学率の向上を目指した推薦入試制度の導入および定着	大学院生と専攻教員の相互コミュニケーションの構築	総合的な議論能力の練成
実行サイクル	3 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）	3 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）	3 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）
実施 スケジュール	平成 30 年 5 月 畜産学専攻 推薦入試説明会 平成 30 年 6 月 畜産学専攻 推薦入試実施	半年に 1 回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握することで、学生への教育の質的向上や改善が可能になる。 平成 30 年 7 月 大学院研究進捗発表会 平成 31 年 1 月 大学院研究進捗発表会	大学院生を国内外の学会、研究会、勉強会や現地調査等に同行させ、他研究者や大学院生との議論能力・コミュニケーション能力の向上を図る。 平成 30 年度 国内外の学会、研究会、勉強会や調査等参加（日程は各教員および大学院生でそれぞれ検討）
目標達成を測定する指標	推薦入試制度を利用した畜産学専攻への大学院進学者数（目標：大学院入学定員数の充足）	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：25 名） ・畜産学専攻以外の学生および教員参加数（目標：10 名）	学会、研究会、勉強会、現地調査等に参加した大学院生数（目標：大学院生が 2 年に一回程度の頻度で参加）
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	平成 31 年度入学に関して、推薦入試による定員数を満たす進学予定者(6 名)を確保した。なお推薦入試は来年度は行わない。これは実施時期早期化により、学生・教員とも被推薦者の適正判断が困難であること、GPA に下限を設けると万能ではないが専門に特に優れ、進学後に成長が期待される者の入学が叶わず、当専攻の考える推薦入試の利点が無くなったためである。	平成 30 年 7 月の発表会において専攻前期課程 2 8 名全員、後期課程 3 名の院生、31 年 1 月の発表会では修了年次生を除く前期過程 15 名、後期課程 3 名のほか、全指導教授および学部学生が参加し、目標人数を達成した。	平成 30 年 9 月時点で学会参加者 18 名、研究会参加者 2 名、海外調査参加者 2 名で、ほとんどの大学院生がこれら外部の催しに参加している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・早期に進路決定が可能	【長所】・所属研究室以外の多数の教員とのコミュニケーションにより、院生の研究面、精神面の現状を多くの教員が共有することができる。	【長所】 ・院生の自発性を養うことができる
	【特色】・指導教授の推薦により教科試験が免除され、自身の実験研究に集中できる	【特色】 ・専門外の参加者への表現力を向上させることができる	【特色】 ・指導教員との緊密なコミュニケーションを必要とする
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】・学部就職率が良好なため、進学を回避する学生が多い ・決定時期が早すぎ、入学決定後に進路変更・入学辞退者が出た。	【問題点】 ・専攻外の参加者が少ない	【問題点】 ・特に無し
	【課題】 ・就職に関して、大学院進学の特長を明確にする	【課題】 ・専攻外部への呼びかけを徹底する	【課題】 ・特に無し
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆推薦入試説明会実施記録等、◆推薦入試志願者数等	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆研究進捗発表会参加者数等実施記録	◆学会、研究会、勉強会、現地調査等、参加実績詳細

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院生の研究レベル高位平準化	大学院生主体の研究論文・学会発表数の増加
実行サイクル	____ 3 ____年サイクル（平成 29 年～ 31 年）	____ 3 ____年サイクル（平成 29 年～ 31 年）
実施 スケジュール	半年に1回の頻度で、専攻全体での研究進捗発表会の機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および内容を議論することで、学生の研究レベルの向上や改善が可能になる。 平成30年7月 前期大学院研究進捗発表会 平成31年1月 後期大学院研究進捗発表会	大学院生が実施した研究を基盤とした成果による国内外の学会への参加を促し、研究論文の雑誌等への投稿数増加を図る。 平成30年度 国内外の学会発表および研究雑誌への論文投稿 （日程など各教員および大学院生でそれぞれ検討）
目標達成を測定する指標	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：25名） ・畜産学専攻以外の学生および教員参加数（目標：10名）	国内外の雑誌等への論文投稿数および学会発表数 （著者に大学院生が含まれるものに限定） （目標：大学院生が2年に一回程度の頻度で学会発表を実施）
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	7月と1月の発表会について専攻内の目標人数を達成した。	平成30年度学会参加者21名・発表演題数29本、論文投稿数9本で、目標数を達成している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特に無し	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特に無し	【特色】 ・特に無し
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特に無し	【問題点】 ・特に無し
	【課題】 ・特に無し	【課題】 ・特に無し
根拠資料名	◆研究進捗発表会参加者数等実施記録	◆学会参加、論文投稿等、参加実績詳細

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院生の就職意識向上	博士後期課程進学者の獲得
実行サイクル	____ 3 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）	____ 3 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）
実施 スケジュール	大学院博士前期課程 2 年進級前から就職活動情報を積極的に提供し、迅速に就職活動を開始できるように準備させる。 平成 30 年度 適宜に学内外の就職活動情報を提供	畜産学専攻博士後期課程に進学する大学院生を積極的に獲得し、将来の大学教員候補を育成する。特に、各研究室における活動の中で専攻教員が大学院生と密なコミュニケーションを取り、博士後期課程の情報などを積極的に提供する。 平成 30 年 6 月および 12 月 大学院進学説明会実施
目標達成を測定する指標	大学院生の就職率	畜産学専攻博士前期課程大学院生への博士後期課程進学紹介者数
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	平成 31 年 2 月現在卒業年次生前期課程 13 名のうち 11 名が就職内定を得ている。なお残り 2 名は当専攻後期過程への進学が決定している。	1 期および 2 期試験において後期課程に内部受験者各 1 名合計 2 名合格
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特に無し	【長所】 ・特に無し
	【特色】 ・特に無し	【特色】 ・特に無し
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・学部卒業生との就職先、就職率の差別化	【問題点】 ・特に無し
	【課題】 ・大学院進学を生かすことのできる就職先の紹介	【課題】 ・ポストクの就職先の確保
根拠資料名	◆平成 30 年 2 月現在卒業年次生の就職内定状況	◆大学院進学説明会実施記録、◆平成 31 年度博士後期課程入試実績等

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオセラピー学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	社会の現場で知的リーダーとして活躍する人材の育成
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）
実施 スケジュール	プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を磨くため ・各研究室における論文紹介、研究発表の場でのプレゼンと聴講 ・毎月定期的に実施される大学院セミナーでの研究紹介と質疑応答 ・年に1度実施される研究中間発表会または修士論文発表会
目標達成を測 定する指標	・毎年度末に実施する大学院生へのアンケート（専攻独自の調査） ・専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・学生のプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を高めるために大学院セミナーを全期期間中に12回実施した ・博士前期学生はポスターによる研究中間報告会を実施し、全員にフラッシュタイムで研究紹介をした後で、自由討論の時間を設定した。博士後期学生は口頭発表を実施し、現状の問題点と研究の将来性について指導教授および学科教員との討論を交えて話し合うことができた ・修士論文発表会を実施し、全員の研究成果について積極的な質疑応答ができた
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・大学院セミナーを開催することにより、専修をこえた学生同士の意見交換が可能となり、指導教員以外の教員による研究の助言が可能になった。また、前期課程学生に対して後期課程の進学を勧めることができた ・他専攻の教員の参加があり、有意義な質問と助言を得ることができた
	【特色】 ・院生および教員の間で研究に対する意識や方向性を共有できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院セミナーを12回実施し、26 人在籍している学生の1回の平均参加率はおよそ50%であったこと。また、専攻内教員の参加率は低いこと
	【課題】 ・学部生や院生の参加を喚起するとともに、他専攻の学生の参加も促したい ・他専攻の教員の参加を促し、多くの意見を得られる研究発表会の実施を考えたい
根拠資料名	セミナー開催記録（PDF）、◆各研究室における論文紹介（資料7）、研究発表の場でのプレゼン等の実施記録（資料1、7）、◆研究中間発表会実施記録（資料3）、◆修士論文発表会記録（資料2）

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院生の研究に関わる研究論文および図書の出版状況を全員で把握し、互いに切磋琢磨する	バイオセラピー学専攻で展開される研究の相互理解を図る
実行サイクル	1 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 31 年）
実施 スケジュール	・毎年度末に①研究論文、②学術図書、③国内・国際学会発表、④研究費獲得状況、⑤学会賞受賞、⑥その他特筆すべき事項を調査し、専攻内教員全員で情報を共有する ・年度末に専攻の研究業績を集めたレポートを作成し、専攻教員、大学院生、研究室に配布する	毎月定期的に大学院セミナーを実施する。専攻の全教員、全院生が一堂に会し各回の担当院生が各自の研究について発表し、科学的議論による研究の相互理解を図る。
目標達成を測 定する指標	・過去の①から⑥の各業績の数値と比較し増減を評価する ・前年度に数値が減少していた業績は当年度の主たる業績増加目標に設定し、年度末に評価する ・専攻独自の年間研究成果報告書	・毎年度末に実施する大学院生へのアンケート（専攻独自の調査） ・専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	年度中につき、専攻内学生および教員の研究成果の把握はできていない。今後年度末に向けて資料収集を進める予定。	大学院セミナーにおいて各研究発表に対しレジュメを提出させ、参加者の研究に対する理解の推進を図った。各セミナー終了後、専攻内教員を含めた自由な討論時間を設定下。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員および学生の成果を専攻で共有でき、研究・教育に活性化をもたらす	【長所】 ・教員間および学生間で、各院生の研究の把握が進んだ
	【特色】 ・専攻内においてどのような研究が進められているかを把握することができる	【特色】 ・セミナー終了後の懇親会の場で自由討論により論議を深めることができ、指導教員以外の意見や発想などを院生が学ぶ機会ができた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・専攻全体の研究の発展・向上にどのように繋げていくか	【問題点】 ・大学院セミナーを12回実施した。26人在籍している学生の1回の平均参加率はおよそ50%であったこと。また、専攻内教員の参加率は低いこと
	【課題】 ・研究成果を投稿論文にするまでの時間の確保（現状では困難である）	【課題】 ・学部生や院生の参加を喚起することとともに、専攻内の教員の参加を促す
根拠資料名	◆①研究論文、②学術図書、③国内・国際学会発表、④研究費獲得状況、⑤学会賞受賞、⑥その他特筆すべき事項の調査結果レポート（資料7）	セミナー開催記録（PDF）、◆大学院生へのアンケート結果（資料1-5、1-6）、◆専攻会議議事録（資料6）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	専攻の教育研究の宣伝による大学院進学者の充実
実行サイクル	____1____年サイクル（平成 ____29____年～ ____31____年）
実施 スケジュール	・学部学生が一堂に会する機会を利用して大学院教育の意義と魅力を説明する ・大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の周知と積極的参加の呼びかけ
目標達成を測 定する指標	・大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の学部生の出席者数 ・大学院進学者数の増減
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・大学院セミナーを12回実施した ・入試説明会の開催を実施した ・今年度の大学院入試の結果は、推薦入試受験者2名、Ⅰ期入試受験者前期課程4名・後期課程2名（合格者：前期課程3名、後期課程2名）、Ⅱ期入試受験者前期課程2名・後期課程1名（合格者：前期課程2名、後期課程1名）であった
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・大学院セミナーを開催することにより、専修をこえた学生同士の意見交換が可能となり、指導教員以外の教員による研究の助言が可能になった。また、前期課程学生に対して後期課程の進学を勧めることができた
	【特色】 ・院生および教員の間で研究に対する意識や方向性を共有できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院セミナーへの参加を学科・専攻を問わず学生参加を掲示にて開示したが、当専攻学生以外の学生参加はない
	【課題】 ・学部生の参加を推進するための対策が必要である。学部授業内や各研究室における専攻実験・実習において大学院セミナーへの参加を促すなどの対策として挙げられる
根拠資料名	セミナー開催記録（PDF）、◆入試説明会実施記録（資料5）、◆大学院進学者数の推移、◆中間発表会及び修士・博士論文発表会実施記録等（資料2、資料3）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究室という集団の中で、研究、実習を行うことでコミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性や対人関係の構築力を養うと共に、各個人の独自性、創造性を発掘する。	最先端の知識、技術を習得する中で、自ら情報を収集する能力、問題解決能力を養う。	自らの研究内容を自在に発信・討論できる能力を養成する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）
実施 スケジュール	分野ごとの特論実験（一）、（二）において研究室内での実験実習、担当教員とディスカッションを通じて教育指導を実施する	分野ごとの特論（一）、（二）において基礎的な知識や最新の研究の動向を理解すると共に、学会、研究会に参加する。	研究室ごとに開講・実施されるプレゼンテーション法において、プレゼンテーションの基礎を学ぶ。また研究成果を国内外の学会、研究会で発表する。
目標達成を測定する指標	研究室での活動率、および中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。複数の教員で各大学院生の進捗を把握すると共に、適切な指導を行う。	中間発表会、修士・博士論文発表会で判断する。また学会、研究会で得られた情報を教員と共有する。	中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。また学会での発表も評価の指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	自らの情報収集をもとに新たな課題の提案などもあり、また問題解決を行うためのコミュニケーション能力も十分に示された。	積極的な学会発表、参加を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・研究（研究室活動）が主であるため、院生同士での繋がりが密である。	【長所】 ・異分野の教員との積極的なディスカッション。	【長所】 ・年2回程度の外部での発表を目指している。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	中間発表会、修士・博士発表会プログラム	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、発表学会リスト	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、学会発表者リスト

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を推進させる為に、国内外での研究動向、情報をいち早く収集する。	先端研究の推進には、先端技術を駆使した機器および試薬の使用が必須であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学術論文の投稿だけでなく、一般向けの講義、講演会やインターネット、出版物を通じて研究成果を発信する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）
実施スケジュール	学会、研究会に参加しこれらの情報収集に役立てる。また有益な情報は学科教員間で情報交換する。	原則として、教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	学内、学外での模擬講義、出張講義、講演会を実施する。 Web 上での情報発信を行う。
目標達成を測定する指標	学会、研究会への参加状況を確認する。	外部資金申請者、獲得者を確認する。	投稿論文数、模擬講義、講演の回数を確認する。ホームページのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☒ を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	全員ではないが外部資金の獲得状況は良好である。	状況は良好である。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・他分野の研究者同士での積極的な交流が可能。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	学会、研究会への参加状況	外部資金申請、獲得状況	論文リスト、模擬講義実績、講演会実績

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	本専攻での研究成果を海外に発信する。	生命科学分野の教育・研究を通じてグローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換のできる人材を育成する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）	__2__ 年サイクル（平成29年～30年）
実施 スケジュール	国際学会への参加を奨励する。また研究成果を英語の論文としてまとめ発表する。	英語によるプレゼンテーション研修を実施する。国際協力センターの留学プログラムの周知と短期留学を奨励する。これに加えて海外でのインターンシッププログラムを企画する。
目標達成を測定する指標	国際学会への参加回数、論文掲載数を確認する。	英語プレゼン研修については発表会を行い成果を評価する。留学プログラムおよびインターンシップの参加状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	国際学会参加数、掲載論文数	外国人講師による講義、短期海外研修

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農芸化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	農芸化学学問領域の体系的教育の実施と学生の質の向上 1) 広範な知識の効率的学習支援 2) プレゼンテーション能力向上
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年～ 30 年）
実施 スケジュール	1) 様々な観点から農芸化学領域に関する知識を得るための大学院特別講義の開催 2) 外部講師によるプレゼンテーション講習会 3) 大学院研究成果中間発表会（M1）の定期的な実施
目標達成を測 定する指標	1) 講義出席・レポート作成状況を把握する 2) 教員、大学院生間の成果発表会の内容審査を集計し、表彰する
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義およびプレゼンテーション講習会を実施した。学生の出席状況は問題なく、プレゼンテーションのスキル向上も認められた。博士前期課程1年生による研究成果中間発表会は1月に行われた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】プレゼンテーション講習会は少人数制であり、きめ細かい指導が可能
	【特色】知識のインプットから成果のアウトプットまでの指導を一貫して行う
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	プレゼンテーション講習会実施記録（資料 C1-3）、研究成果中間発表会実施記録（資料 A）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	大学院生が関わる研究活動の活性化と研究成果発信の推進
実行サイクル	__1__年サイクル（平成 30 年～ 30 年）
実施 スケジュール	1）指導教員との定期的な研究内容の打合せ、ゼミの充実 2）国内外で開催される関連学会への参加・成果発表、論文発表
目標達成を測 定する指標	大学院生が関わる研究成果の学会発表数と投稿論文数を継続調査する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院生が関わる研究成果の学会発表数：40 件 大学院生が関わる研究成果の投稿論文数：30 報
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・学会発表数・投稿論文数を継続して調査する必要がある。
根拠資料名	学会発表・論文投稿実績（資料 E）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	大学院「農芸化学専攻」受験者数の増加
実行サイクル	__1__年サイクル（平成 30 年～ 30 年）
実施 スケジュール	1) HP と入試説明会などで「農芸化学専攻」を広くアピールする 2) 学部1年次開講の「フレッシュマンセミナー」で大学院進学を意識付けを行う
目標達成を測 定する指標	大学院「農芸化学専攻」受験者数を集計、継続調査を行う。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1期試験では、平成30年度秋入学の博士後期課程2名（留学生1名）、平成31年度入学の博士前期課程27名が受験した。2期試験は6名が受験した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・1年生の大学院に対する意識調査を継続的に実施する必要がある
根拠資料名	◆農芸化学専攻志願者数表、2018年度農芸化学科1年生に対する大学院進学意識調査アンケート（資料D）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名醸造学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年～31 年）	1 年サイクル（平成 30 年～31 年）	1 年サイクル（平成 30 年～31 年）
実施 スケジュール	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程 2 年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。	醸造学専攻特別講義を 1 年間に 2 回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻内の研究発表会を 6 月 28 日に最終発表会を 2 月 20 日に開催したほか、各種学会等への参加も活発に行っている。また、修士 2 年生の就職状況からも、醸造に関わる最新の知見、技術導入の結果、内容が充実していることが伺える。	ポスターによる研究発表会を 6 月 28 日に専攻内で実施し、発表と質疑応答の訓練と実践を通じて、プレゼンテーション能力が向上している。年明け後の 2 月 20 日に、最終発表会（口頭発表）を実施した。	・醸造メーカーの技術者を招き、7 月 18 日に醸造学専攻特別講義を実施した。2 回目は 1 月 25 日に実施した。 ・醸造学専攻後期課程のⅠ期試験合格者は 2 名、Ⅱ期試験合格者は 2 名であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・ポスター発表と口頭発表の両方を専攻全体で実施することで、プレゼンテーションに関する能力を広く身につけることができる。	【長所】 ・定員 1 名に対して、4 名の合格者であり、望ましい水準を維持している。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・社会人特別入試枠による入学者が 1 名いた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	◆研究発表実施記録（資料-包 1 -①-1、資料-包 1 -①-2）、◆学会発表実績研究発表実施記録（資料-包 1 -①-3）	◆中間発表会実施記録（資料-包 1 -①-1）、◆最終発表会実施記録（資料-包 1 -①-2）	◆醸造学専攻特別講義実施記録（資料-包 1 -③）

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科・専攻共通機器の効果的運営のための基盤整備	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	4 年サイクル（平成30年～34年）	1 年サイクル（平成30年～31年）	1 年サイクル（平成30 年～31年）
実施 スケジュール	ワーキンググループを立ち上げ、学科・専攻共通機器を運営するためのルールを策定する。策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	ルールを策定し、既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	・学会発表は、専攻で年間20件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、専攻で年間5件を目標とする。 ・できるだけ Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間5件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	新しく GC-MS が共通機器として導入されたことから、2017 年に策定した運用ルールについて見直しを行なっている。また、2 月 15 日に現共通機器に関する講習会を実施した。	日本生物工学会などの学会参加や学術誌への投稿を積極的に行っている。精力的に研究と論文執筆が行なわれており、関連業界において重要な雑誌や IF が高い雑誌への投稿も多い。	一研究室当たり、公的機関、企業との共同研究が複数あり、達成していると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・新研究棟への移転に伴い、共通機器室を設置するため、その運用についての継続的な検討が必要である。	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	◆専攻授業担当者会議議事録（資料・包 2-①-1）◆機器操作講習会実施記録（資料・包 2-①-2）	◆学会発表実績（資料・包 1 -①-3）、◆外部資金申請実績（資料・包 1 -①-3）、◆論文投稿実績（資料・包 1 -①-3）	◆共同研究等実績（資料・包 1 -①-3）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名食品栄養学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	教育の可視化を図るため、カリキュラムポリシーに沿って体系化されたカリキュラムを構築する。
実行サイクル	3 年サイクル（平成 29 年～31 年）
実施 スケジュール	本専攻において新たに制定したカリキュラムポリシーを達成するため、平成 30 年度からのカリキュラム内容の抜本的な見直しを行い、「食品栄養学特論」と「人間栄養学特論」を必修科目として配することで、初期の段階での食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得することを可能にするとともに、「食品栄養学特別演習」、「食品栄養学特別実験」をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで論文作成プログラムの体系化を進め、教育の可視化を図る。
目標達成を測 定する指標	(1) シラバスへのアクセス数を現状との比較により確認する。 (2) 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	博士前期課程科目に対する学内アクセス数は 1～28 であった。しかし、新カリキュラムに該当する博士前期課程の学生数は 2 名と昨年よりも少ないため、昨年度との比較を適切に行うことが難しいと考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・目標達成を測定する指標（1）においては、在籍者数に変動すると考えられ、正確な指標とは言いにくい。
問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・目標達成を測定する指標（1）よりも適切な指標を示す
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料（資料 19）、◆シラバスアクセス数（資料 20）、◆授業アンケート結果

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の取得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	____1____年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測 定する指標	達成度を判断するための指標としては、 (1) 教員の学会発表演題数 (2) 学術論文掲載数 (3) 外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各教員の学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数は一定数認められたことから、研究活動が適切に推し進められている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	2018 研究活動報告（資料 21）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	(1) 学内推薦入試を導入する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学内推薦入試を導入したが、応募者はいなかった。専攻内会議において、H32 年度推薦入試の応募要件（GPA 2.7 以上）などを再検討したが、次年度も現行のままの条件で行うこととした。大学院特別講義への学部生の参加は一定数認められ、研究に関する意識付けは部分的になされたと考えた。昨年度からの試みもあり、本年度の受験者数・内部進学者数は昨年度よりも増加した。卒業論文研究への早期着手に関しては、各研究室の事情などもあり、バラツキがあった。 2020 年年度推薦入試の実施については、1 月開催の専攻主任会議において研究科全体で最終確認をし、本専攻を含む 6 専攻で実施することで承認された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・推薦入試への応募者がいなかった。 ・卒業論文研究への早期着手は、各研究室にバラツキがあった。
	【課題】 ・推薦入試における応募要件の基準がやや厳しい ・卒業論文研究への早期着手に向けて各研究室は努力する
根拠資料名	2018 大学院食品栄養学特別演習一覧（資料 1）、◆内部進学者数、進学者数等、◆専攻会議での検討を示す議事録・資料（資料 15）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名林学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	◎教育課程編成方針に従った大学院授業計画の改善 教育課程編成方針に基づき、大学院授業内容の点検・見直を通して授業計画の改善を進める。	◎大学院教育の評価を通じた教育の改善 毎年実施される大学院授業・指導アンケート調査をにし、教育・指導の改善を進める。
実行サイクル	_____2年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	_____1年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	・授業科目の点検を行う。 ・授業科目の内容の見直しを行う。 ・授業科目の点検・見直しを通して授業計画の改善を行う。	・大学院授業・指導アンケート調査の分析を行う。 ・調査の分析に基づいた教育・指導の改善策を策定する。
目標達成を測 定する指標	・授業計画改善点の明確化 ・改善に基づく授業計画の実施	・調査結果の分析 ・調査結果の分析に基づいた改善策の策定 ・改善策の実施
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	授業科目のシラバスの内容の点検を実施 シラバスの内容の点検を受けて授業計画・内容の検討の実施	大学院授業・指導アンケート調査の分析を実施 調査分析に基づく教育・指導の改善点の検討 教育・指導に関する改善点の周知
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に寄与	【長所】 ・大学院授業・指導アンケート調査の分析による具体的な意見等を基にした教育・指導への改善への寄与
	【特色】 ・授業の計画・内容の向上に繋がる	【特色】 ・具体的な意見等を教育・指導の改善へ繋げることが可能となる
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・シラバス内容の教員間での共有に不十分な部分があった	【問題点】 ・大学院授業・指導アンケート調査の回答率が低い。
問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・シラバス内容の教員間でのクロスチェックが今後の課題	【課題】 ・大学院授業・指導アンケート調査に関する回答率を高める。
根拠資料名	◆シラバス	◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	◎研究指導体制の強化 研究分野ごとに複数の教員の連携・指導を通して知識の高度化や研究力のアップを図る。	◎研究成果公表の推進 研究成果の公表を通じた研究・指導の推進を図る。
実行サイクル	_____4年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	_____1年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	・研究分野ごとの情報の共有化を図る。 ・研究分野ごとの連携を図る。	・研究成果の公表スケジュールを検討する。 ・研究成果の公表にあたっての研究内容を指導する。 ・研究成果の効果的公表方法を指導する。
目標達成を測 定する指標	・研究分野ごとの情報の共有化 ・研究分野ごとの連携・協力の実施	・研究成果の公表
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻会議等を通して研究分野ごと情報共有、連携に関する話し合いを実施 研究分野の将来構想に関する議論の展開	研究成果公表のスケジュールの検討と公表の周知 成果公表にあたっての内容・方法の指導 学内での中間発表及び最終発表（M2）、所信発表（M1）の実施 研究分野ごとの関連学会発表会への推奨
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・直接的対話・議論による情報共有化の向上	【長所】 ・研究成果の内容の吟味、まとめ方の向上
	【特色】 ・情報の共有化及び連携の強化に貢献	【特色】 ・研究成果の取り纏め方、伝達の向上に寄与
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・研究分野の将来構想に関する議論が十分に尽くせたとはいえない	【問題点】 ・研究成果の関連学会での発表，あるいは専門雑誌への発表について研究分野間での差が認められた
	【課題】 ・引き続き議論を継続する	【課題】 ・研究成果の取りまとめ指導の上での，教員の十分な時間の確保
根拠資料名	なし	◆研究成果公表に関する資料、◆中間発表及び最終発表、諸新発表の実施記録、◆学会発表会参加実績

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	◎大学院生の修学・生活相談の推進 大学院生の当初の目的達成に向けて、効果的な修学を図るとともに生活面での相談を推進する。	◎大学院生の就職支援に関する取り組み 大学院生の就職にあたっての支援を強化する。
実行サイクル	_____1年サイクル（平成 30 年～ 年）	_____1年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	・大学院生の修学目的を共有する。 ・効果的な修学を検討する。 ・生活状況を把握するとともに生活相談を推進する。	・就職相談を積極的に受ける。 ・就職情報を提供する。
目標達成を測 定する指標	・大学院生の修学目標の共有化 ・効果的修学の検討 ・生活相談の実施	・就職相談の実施 ・就職情報の提供
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院生との修学にあたっての協議を実施	就職情報の積極的な提供と就職相談の実施
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員・院生間の相互理解の向上	【長所】 ・就職内容のより詳細な把握が可能 ・大学院生の就職率の向上に貢献
	【特色】 ・教員・院生間の信頼感の向上	【特色】 ・就職情報のより詳細な提供
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし 【課題】 ・大学院生間，教員間，大学院生および教員間での意思疎通に一部不十分な面があった	【問題点】 ・なし 【課題】 ・すべての大学院生が就職あるいは進学と進路が確定したが，この流れを今後も確保したい
根拠資料名	なし	なし

研究科名地域環境科学研究科

研究科委員長名上原 万里子

専攻名農業工学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	博士前期課程におけるシラバスに基づいた院授業の実施
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年度）
実施 スケジュール	前期 4 月～7 月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9 月～1 月 シラバスに沿った院授業の実施 12 月～1 月 平成 31 年度院授業シラバスの策定
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果を指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバスを重んじることで、教育内容の見直しが可能になる。 【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ 【課題】 ・
根拠資料名	・平成 30 年度大学院シラバス（資料 1-1） ・授業実施報告書（資料 1-2）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	博士後期課程の大学院生に対する国際会議での発表の推奨
実行サイクル	1 年サイクル（平成30年度）
実施 スケジュール	4月から適時、農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測 定する指標	平成30年度中、発表数／在籍院生数で1を目指す。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	9月はじめに、サマーセミナーを実施し、留学生と日本人学生の混合グループでの共同作業により、国際会議を模式したポスターの作成、ポスターセッションを行った。今年度のテーマは「国際会議におけるエクスカーションの実施案」についてとした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・世界の動向を見据えた行動ができ、国際会議運営側に携わる素養を持った人材の輩出が可能になる。
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	・サマーセミナーのプログラム（資料2-1） ・国際会議のプロシーディング（資料2-2）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	農業工学分野におけるグローバル学術リーダー育成プログラムの実施
実行サイクル	1 年サイクル（平成30年度）
実施 スケジュール	採択後、6・7月からグローバル学術リーダー育成プログラムを開始し、9月に富士農場に英語による研究発表・交流会でサマーキャンプを実施する。併せて農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果および英語論文の投稿数を指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	9月はじめに、サマーセミナーを実施し、留学生と日本人学生の混合グループでの共同作業により、国際会議を模式したポスターの作成、ポスターセッションを行った。今年度のテーマは「国際会議におけるエクスカーションの実施案」についてとした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・言語を問わずコミュニケーションを行うことができるようになる。
	【特色】 ・ポスター発表とすることで、内容について深い議論を行う訓練ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・宿泊で行うため、経費の捻出、参加教員の日程調整に苦労している。
	【課題】 ・
根拠資料名	・サマーセミナーで作成したポスター（資料3-1）

学部・研究科名 大学院農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 造園学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	ディプロマポリシーに基づく、カリキュラムプログラムの「質」の向上
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施 スケジュール	カリキュラム・ポリシーに基づき、院生に教育目標を十分に周知すると共に、必修科目「造園学総論」において、造園学の形成発展など、建学の精神に基づく教育理念を共有する。また平成 29 年度より、新カリキュラムに移行しており、今まで以上に専門分野の深化を主眼としたカリキュラムプログラムの構築と実施を行う。
目標達成を測定 する指標	大学が実施する授業評価に基づき、大学院生が求める講義・演習内容を把握する。その結果に基づき、教員が学生に伝えるべきことを教員相互で検討する。講義・演習内容とのすりあわせを十分に検討し、授業に反映する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年は、特に在籍数が少なかったこともあり（1 年生は 6 人）、個人レベルで緻密な指導ができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・柔軟な教育，指導ができた。
	【特色】 ・個人レベルで緻密な指導ができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年 度への課題	【問題点】 ・在籍数が少ないことによってできた指導体制ともいえる。
	【課題】 ・在籍数を充足することを目標にしており，その時の指導体制を早目に確立する。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料②、◆授業評価アンケート⑨、◆授業評価アンケートに対する改善計画書⑩

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	院生の研究意欲の向上と修士（博士）論文（制作）の質的内容の深化
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施 スケジュール	博士前期課程：造園学会全国大会（毎年 9 月に申込）、関東支部大会（12 月実施）、その他樹木医学会や芝草学会等関連学会への投稿数を増やす。博士後期課程については、国際学会（ワークショップ）への参加、論文の投稿数を増やす。
目標達成を測定 する指標	論文検討会、公開研究発表会の実施、関係研究機関での口頭発表・論文発表会への参加。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	特に本年は、「教育改革推進プロジェクト」の予算の獲得によって外国人教員の招聘を多く行い、国内外の研究情報を取り入れた他、学会への発表件数の増加を図った。特に博士後期課程学生については、SEARCA 等にも参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・「教育改革推進プロジェクト」の経費は主に外国人招聘と、大学院生の学会等への発表数の増加を図ることを目的としている。
	【特色】 ・国際化が叫ばれている中、日本の造園の特徴を引き出す。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年 度への課題	【問題点】 ・専門学（造園）に関わる国際学会やワークショップが年々増加している状況の中、海外開催プログラムへの参加数は増加していない。
	【課題】 ・経費等も勘案しながら国際学会（ワークショップ）への参加数も今後増やしていく。
根拠資料名	◆論文検討会、公開研究発表会の実施記録④、◆関係研究機関での口頭発表・論文発表会への参加実績⑦、◆論文投稿実績⑦、◆「教育改革推進プロジェクト」関連書類⑩

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	産・官・学・民の連携による大学院教育・研究活動の推進と発信
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年 4 月～31 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の最終年度）
実施 スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために、フィールドワークなど（国内外）を通じて授業・研究に相互に反映する。
目標達成を測定 する指標	教育・研究成果の HP を通じての外部発信や、MLA アワード（最優秀修士論文賞）授賞講演会の実施など。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	国際化への対応の一つに、本年度は特に中国北京林業大学を夏季集中授業として訪問し、活発な議論も行った。これらの実施記録について学部生に発表する機会を設けるなど、プレゼンテーション能力の技術向上にも努めた。ただしホームページの開示システムがよく理解できていなく、その敏速な対応が困難になっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・フィールドワークを通じた授業・研究を充実させた。
	【特色】 ・学部間協定校との MOU 締結後、教育・研究に活かすことのできた実質的な成果である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年 度への課題	【問題点】 ・定期的に新情報を発信するためのシステムが充実していない。
	【課題】 ・定期的な外部発信を行うための専門技術者（ホームページ担当）の確保が望まれる。
根拠資料名	造園学専攻ホームページ、◆MLA アワード（最優秀修士論文賞）授賞講演会の実施記録 (https://www.nodai.ac.jp/application/files/7415/3050/2813/2018.pdf) ⑬、 ◆中国北京林業大学横紋記録及び実施記録の学部生への発表会実施記録等 (https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/topics/Beijin/) ⑬

学部・研究科名大学院農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名国際農業開発学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	自然科学および社会科学にわたる広範な学問領域を統合する総合的アプローチにより、農業開発や国際協力にかかわる問題の解決を図るための論理的な思考力と実践力を持つ	異なる文化や習慣を尊重した活動を展開できる人材を育成する	国内外の農業開発ならびに国際協力分野でリーダーシップをもって活躍できる人材を育成する
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	自然科学と社会科学の両領域で、それぞれ基幹となる必修科目を履修し、総合的な知識を修得するとともに、農業開発や国際協力にかかわる諸問題や研究手法について学ぶことを目的とし、各研究領域をカバーする座学科目および実験・演習科目ならびにフィールド調査を選択科目として履修する。	他国の文化・社会・習慣などの多様性に十分な知識と理解を有し、柔軟な思考力と判断力、さらにコミュニケーション力を身につけ、演習・実験を通して国内外のどの地域でも自己の能力を発揮して社会に貢献することができる能力を養う。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などを実施し、国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在としてリーダーシップを発揮できる能力を養う。
目標達成を測定する指標	カリキュラムの実施状況	専攻の全指導教授または指導准教授が出席し、発表者に対してコメントや意見を述べる専攻内研究発表会の開催状況、多様な国からの留学生が参加して行われる総合交流の場としてコーヒブレイクの実施状況。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施状況。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	すべてのカリキュラムを適切に実施した。	院生発表会は予定どおり前学期に 1 回実施した。 後学期にも実施する予定である。	国内外におけるフィールド調査は 5 名程度の院生が実施した。 特別講義とインターンシップは今のところ実施していない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、授業以外で院生とコミュニケーションをとる時間が十分に確保できない。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆授業実施報告書	◆専攻内研究発表会会実施記録、 ◆大学院留学生	◆特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国内外の農業・農村開発の現場におけるさまざまな問題解決に貢献する課題解決型研究の推進	農業・農村開発を通じて国際的に活躍する人材を育成するため、国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施	国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在として活躍する人材を育成するため、地域・社会と連携した研究活動の実施
実行サイクル	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	学内外の競争的資金を獲得し、研究プロジェクトを実施する。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究を実施する。	地域・社会と連携した研究を実施する。
目標達成を測定する指標	研究プロジェクトの実施状況。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施状況。	地域・社会と連携した研究活動の実施状況。
自己評価 (☒ を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻教員 15 名中 11 名がのべ 24 件（学内 4 件、学外 20 件）の競争的資金を獲得し、研究代表者・研究分担者・プロジェクトマネージャーなどとして研究課題を遂行している。	専攻教員 15 名中 7 名がのべ 22 件（国内 7 件、国外 15 件）の連携研究を実施している。	専攻教員 15 名中 6 名が国内外でのべ 15 件の人材育成に関わる研究活動を実施しており、この研究活動は国内外の地域・社会との連携が伴う内容となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、研究プロジェクトを実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、連携研究を実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、地域・社会と連携した研究活動を実施する時間が十分に確保できない。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆科研費など競争的資金獲得状況	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	地域社会と連携した取り組みを推進する。	民間企業などと連携した取り組みを推進する。
実行サイクル	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	地域社会と連携した取り組みを実施する。	民間企業などと連携した取り組みを実施する。
目標達成を測 定する指標	地域社会と連携した取り組みの実施状況。	民間企業などと連携した取り組みの実施状況。
自己評価 (☒)を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻教員 15 名中 6 名が国内外で実施する研究活動は、地域社会と連携して実施している。	専攻教員 15 名中 2 名が国内外でのべ 2 件（国内 1 件、国外 1 件）の民間企業と連携したとりくみを実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、地域社会と連携した取り組みを実施する時間が十分に確保できない。	【問題点】 ・多くの教員が学部学生への教育や学内業務に忙殺されており、民間企業などと連携した取り組みを実施する時間が十分に確保できない。
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆科研費など競争的資金獲得状況

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農業経済学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	大学院生が的確かつ体系的に情報を整理する能力と論理的思考能力を醸成するため、プレゼンテーション法、論文作成法、総合演習を実施し、教育力の向上を図る。
実行サイクル	_____1年サイクル（平成30 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回総合演習の実施（6月） 第2回総合演習の実施（11月） 第3回総合演習の実施（12月） 第4回総合演習の実施（1月） プレゼンテーション法・論文作成法（随時）
目標達成を測 定する指標	①各総合演習の報告資料 ②プレゼンテーション法・論文作成法の受講者数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	◆総合演習の実施記録、◆プレゼンテーション法・論文作成法の受講者数及び実施記録

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	農業経済学専攻では、大学院生が社会科学の専門領域における知識と研究能力を修得することを目標としており、本専攻の大学院生による学術雑誌『農経研究報告』をはじめ、各専門領域の学会で、教員との共同研究を含め研究発表や学会誌への投稿を行い、研究力の向上を図る。
実行サイクル	_____1年サイクル（平成 30年～ 年）
実施 スケジュール	『農経研究報告』への投稿準備（7月） 『農経研究報告』への投稿（9月） 『農経研究報告』の査読結果への対応（10月～12月） 『農経研究報告』の発行（3月） その他の学会発表・学会誌への投稿（随時）
目標達成を測 定する指標	①『農経研究報告』への掲載論文 ②大学院生の学会発表、学会誌投稿・受理の状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	◆『農経研究報告』への投稿状況等、◆学会発表、学会誌投稿・受理状況

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	近年、農業経済学専攻では入学者が少ない傾向にある。博士前期課程、博士後期課程ともに、入試受験者確保に向けて努力する。
実行サイクル	_____1年サイクル（平成 30 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回大学院入試説明会の実施（5月） 第2回大学院入試説明会の実施（6月） 学内推薦入試（6月） 1期入試等（7月） 第3回大学院入試説明会の実施（11月） 2期入試等（1月）
目標達成を測 定する指標	①各入試説明会の参加者数 ②各入試受験者数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1月に平成32年度推薦入試の実施について検討を行い、平成31年度の5月下旬に実施することになった。また、平成32年度推薦入試から、GPAが2.0以上とする条件を追加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	◆入試説明会実施記録（参加者数）、◆入試志願者数

研究科名 農学研究科
研究科委員長名 上原 万里子
専攻名 国際バイオビジネス学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院の講義における成績の相対評価化 (将来的な GPA 導入の環境整備)	AP/DP に適合した大学院生の研究・プレゼンテーション能力の向上
実行サイクル	4 年サイクル (平成 29 年～ 32 年)	4 年サイクル (平成 29 年～ 32 年)
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策 (改善点) の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会 (中間・最終) の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、新たな研究・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測 定する指標	①相対評価を実施する教員数 (比率) ②相対評価を実施する科目数 (比率)	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生が海外の大学院に進学を希望する場合、GPA の提出を求められることがある。このため、将来的には大学院に GPA を導入すべきであると考えている。そこで、成績評価に相対評価を導入することを検討しており、必修科目の一部にて相対評価を導入している。	研究報告のためのレジメのフォーマット化 (日本語・英語) を推進し、学外における研究発表原稿作成能力を向上させている。一部の研究室では、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるなど、プレゼンテーション能力の向上を意図した指導を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会を審査し、審査結果に基づき必修科目の成績を相対評価している。	【長所】 学会報告資料や論文投稿のための論文作成能力向上をはかっている。
	【特色】 博士前期課程の最終報告会を学位取得のための最終口頭試験と位置づけ、院生の奮起を促している。	【特色】 日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 すべての科目・教員が相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 学生の能力による格差があるため、学生満足度調査を実施するに至っていない。
	【課題】 一部成績が相対評価であれば、GPA 算出に意味が出るため、引き続き GPA 導入を検討すべきである。	【課題】 すべての研究室において個別に指導が行われているため、統一的な改善度評価が課題である。このため改善度、満足度を測定しておらず、次年度より計測していきたいと考えている。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、最終報告会資料 一部科目において相対評価を実施した教員数 15 人 (100%)、 相対評価を実施した科目数 2 科目 (6.3%)	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、◆レジメのフォーマット、中間報告会資料、修士論文フォーマット、大学院発表会の評価結果 改善度評価 (教員) では「改善したが」8 名 (53%)、満足度評価 (学生) は未取得

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	バイオビジネス分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施 スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への応募可能性の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①外部資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画の策定 ②外部資金等の獲得に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①外部資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	平成29年度は在籍者4名中2名が応募し1名が採択されたが、今年度は在籍者5名中1名が応募し不採択となった。在籍者のうち3名が博士後期3年生であり、論文作成などで多忙を極めていることから研究支援制度の応募について積極性がみられない。	外部との共同研究については、個々の教員・院生において共同研究が実施されており個々に成果をあげている。昨年度は、個々の教員が実施している研究課題の成果発表と今後の課題について勉強会を実施したが、専攻全体で統一した共同研究の構想、研究計画を行うには至っていない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 博士後期3年生に積極的な姿勢がみられず応募数が少ない。	【問題点】 それぞれ独自分野で研究を進めており、専攻全体での共通課題の策定が困難である。
	【課題】 応募数を増やすため、書類作成・支援体制の構築が必要である。	【課題】 研究課題作成のための勉強会を継続的に開催する必要がある。
根拠資料名	◆博士後期課程進学者数（進学率）	大学HPの教員紹介、2019年3月1日勉強会実施（教員2名報告）

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国際バイオビジネス学専攻教育課程の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	____4____年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	____4____年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	____4____年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施 スケジュール	<u>①現行教育課程の検討と問題点の抽出</u> <u>②国際バイオビジネス学科の教育課程改革との関係性の検討</u> <u>③上記①と②を踏まえた専修分野の見直し（分野数、内容、名称、科目等）</u> <u>④農学研究科専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出</u>	<u>①大学院生の生活実態の把握</u> <u>②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集</u> <u>③大学院生（＋入学予定者）への奨学金申請の促進</u>	<u>①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。</u> <u>②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。</u> <u>③適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>
目標達成を測定する指標	① <u>平成33年4月に新たな教育課程が整備されていること</u>	<u>①学外奨学金応募者数</u> <u>②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合</u> <u>③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援</u>	<u>①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u>
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	教育課程を希望する大学院生が入学しておらず、教育課程の検討や問題点の抽出について検討していないのが実情である。しかし、新カリキュラムにおいて検討すべき事項であり、H33 年の教育課程の整備は実現可能であると考えられる。	博士前期課程については大学院進学時に外部の奨学金に応募するよう指導しており、留学生は全員応募した。日本人学生は応募の実態を把握していないが、応募していないものと思われる。	就職希望の日本人学生（対象は1名のみ）は、指導教員が就職指導を実施し、夏季休暇中のインターンシップへ参加した。留学生は、インターンシップ参加者が1名のみであった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 本専攻は留学生が多く、CIP より得た情報に基づき積極的に応募している	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 日本語能力が低い留学生の採択が少ない傾向にある	【問題点】 留学生の就職希望の実態把握が困難である。
	【課題】 特になし	【課題】 日本語による書類作成の指導体制ができていないため、指導教員の負担が大きい。サポート体制の構築が今後の課題である。また、応募状況を把握できていないため、次年度以降、専攻内で報告を義務付けたい。	【課題】 留学生は帰国か日本で就職かの決断が遅いため、インターンシップの検討ができていないことが課題である。また、実態把握に向け、指導教授から報告するよう改善したい。
根拠資料名	専攻会議議事録	奨学金推薦資料（一部のみ、個人情報につき部外秘） 奨学金応募者数10名（採択数は不明）	インターンシップ参加者数4名

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名環境共生学

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	地球環境の悪化に伴う自然生態系保全やひとの生活環境への影響を削減方策など、環境共生型社会の構築を具現化するための理論や方法を探求する研究能力を有し、独創的かつ学術的な立場から社会に貢献しようとする広い視野，問題意識，強い意欲を教育する。
実行サイクル	3年サイクル（平成29年～31年）
実施 スケジュール	各指導教員による院生に対する個人指導の充実，専攻における院生の口頭論文発表会実施の充実（学位論文公开发表会前に中間発表会の充実），各指導教員による国内および国外学会発表の推進，国内外の おける学会誌への研究論文投稿の推進，より質の高い学位論文の作成指導について，3年間かけて充実していく。
目標達成を測 定する指標	指導教員による綿密な研究論文指導を通して，各院生には年2回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い，専攻教員が評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	生物学，資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して，学位授与のための教育課程を編成し，各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育してい る。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる。
	【特色】 ・環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・社会人院生が多く在籍するため，指導教授との相談は密に行われているが，院生同士の研究交流の機会多くする努力が必要である。
	【課題】 ・指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし，研究交流を密にする。
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，ガイダンス資料 大学院海外研究発表支援プログラム ◆高等論文発表会実施記録、中間発表会実施記録、◆学会発表実績、◆論文投稿実績

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	現在の院生の半数以上は海外に眼を向けた食品流通に関する研究であることから、将来にわたり研究発表の場の国際化を推し進めるとともに、地球規模での環境共生に係わる問題研究を進める。
実行サイクル	3年サイクル（平成29年～31年）
実施 スケジュール	現在の院生による研究が、より質の高い成果が得られるよう専攻教員が支援しながら、年次ごとに進める。また、年度ごとに入学する院生は、環境共生学専攻の研究の進め方についても逐次理解してもらう。
目標達成を測定する指標	院生には年2回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い、専攻教員が評価する。さらに、国内外の学会で研究発表を行い、その評価を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	院生は、国内外において、研究活動および研究学会発表を実施しており、その成果を学会誌等へ掲載することを目指しており、それに対して指導教授が丁寧に指導している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・授業以外と時間においても、丁寧な研究および論文作成指導を実施している。
	【特色】 ・院生に対して、研究発表会などを通して、指導教授ばかりでなく、他の専攻教員からも、指導を行える体制を整えている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・現状維持
根拠資料名	専攻会議議事録、授業実施評価報告書 研究発表会抄録、大学院海外研究発表支援プログラム ◆スクーリング実施記録、

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	社会人で、幅広く農学分野で環境共生学に関する高度な知識と独創的研究能力を学び学位論文の取得を希望者される方が多く入学できることに力を入れる。
実行サイクル	3年サイクル（平成29年～31年）
実施 スケジュール	環境共生学専攻独自の入試制度および奨学金制度である社会人特別選抜制度を生かし、広く社会人で学位を取得希望する入学者を増やす体制を整備する。専攻独自のホームページの充実を図り、働きながら学位を3年間で所得できる特色をよりPRしていくとともに、専攻の指導教授の研究分野・専門性を明確にしホームページで公開していく。
目標達成を測 定する指標	入学定員の確保
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学全体で発信している募集情報だけでなく、専攻独自特色あるホームページから、とくに社会で活躍している経験と知恵と研究力を学位取得につなげる指導体制を整えていることをPRし、社会人特別選抜という入試制度を活用して、働きながら3年間で学位取得できることを実施してきた。さらに、仕事の関係で3年間では取得ができない院生には、入学当初から長期履修制度により対応できるように体制を整えており、順調に実施している。また、専攻の個々の教員も積極的に学生募集を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・とくに、社会人選抜試験入試制度を主体として、働きながら3年間で学位取得できることを、専攻独自のホームページに明記し、指導体制を明確化し、院生獲得に努力している。
	【特色】 ・専攻独自のホームページからも、とくに社会人選抜入試での学位所得のシステムがあることを明記していること。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・現状の継続と院生確保のため、専攻教員の募集活動充実
根拠資料名	現状の継続と院生確保のため、専攻教員の募集活動充実、◆専攻HP、◆入学志願者状況

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名食品安全健康学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	プレゼンテーション能力を高める
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年～ 30 年）
実施 スケジュール	学会での発表を積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	大学院生の学会での発表数を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	積極的に学会発表を院生に行わせている。今年度は 18 名の一年次生のみであるが、26 件の発表を行った。さらに、17 名が 12 月 7 日に行われた学内大学院研究説明会にてポスターを出展し、積極的に自身の研究内容を教員、学生に発表した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・積極的に学会発表を行うことで、その準備段階からプレゼンテーションについて学ばせることができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	◆学会発表した主な学会名

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	食品安全健康学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。	様々な研究助成などからの外部資金の取得を試み、研究活動の推進につなげる。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 30 年～ 30 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康分野に関連する国内外の学会で発表する。 2. 食品安全健康分野に関連する和文誌、国際誌に投稿する。	外部資金獲得のために科研費、財団の研究助成、学内プロジェクト、企業との共同研究などに応募する。
目標達成を測定する指標	1. 学会発表数を確認する。 2. 学術論文掲載数を確認する。	外部資金の申請数および採択数を確認する
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	教員発表あるいは教員がかかわる学会発表数は延べ 86 件となった。また、学術論文への掲載数は 36 件であり、今年度は専攻で行われた研究が積極的に発表された。	外部資金の申請数は 29 件、委託研究数 35 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆学会発表した主な学会名、◆論文投稿した主な雑誌名	

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	受験者数の増加を図る	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本学科のディプロマポリシーに明記されているように、「食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身に付けている人材」を育成していることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	____1____ 年サイクル（平成 30 年～ ____ 年）	____1____ 年サイクル（平成 30 年～ ____ 30 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、毎年、大学院での研究、研究職の魅力などについて、学期最初に行われるガイダンスなどを通じて PR する。とくに3年生には、就職活動が始める前、すなわち後学期始まる頃に PR を行う。 3. 専攻説明会を3回以上行う。	1. 本学主催の企業懇談会に出席し、多くの企業に本学科の教育について説明する。 2. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。
目標達成を測定する指標	1. 平成 31 年度食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	1. 企業懇談会で名刺交換した企業数を確認する。 2. 参加学会を確認する。 3. 問い合わせを受けた企業数を確認する
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 第1期入学試験の本専攻受験者数は推薦入試も含め、17名であり、昨年度とほぼ同数だった。1月に行われた第2期入試は、説明会等を行い、受験者数は6名と昨年よりも多かった。 2. 専攻説明会を3回行った。3回までの参加人数は、48名で、昨年以上の参加者数だった。 3. 大学1年生～4年生のご父母に対して、積極的に大学院の紹介を行った。また1年生入学時にも大学院について説明した。	本年10月26日に行われた企業懇談会では積極的に参加された企業の方と名刺交換を行った。また、学会の懇親会には延べ68名が参加した(資料参照)。企業の問い合わせの企業数64社であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆志願者数等、◆専攻説明会ポスター	◆参加学会（詳細）